ヒフミちゃんアーカイブ

煮豆

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ではこれより――正義実現委員会を襲撃する」

ここはキヴォトス。数千の学園が寄り集まって作られた、巨大な近未来都市である。

生徒たちは皆、頭の上に輪っかがあったり、時に角が生えてたり、翼が生えてたり、獣耳が生えてたりするけれど、そんなものは些細な問題である。

今日もキヴォトスにはいつも通り、銃弾が飛び交い、爆発の音が木霊する、阿鼻叫喚で和気あいあいとした平和な日常が広がっていた。

※キヴォトス１最高に可愛いヒフミちゃんの日常をメインにお送りしていく予定です。よろしくお願いします。

目次

子猫救出大作戦（1／7）……1
子猫救出大作戦（2／7）……9
子猫救出大作戦（3／7）……18
子猫救出大作戦（4／7）……25
子猫救出大作戦（5／7）……30
子猫救出大作戦（6／7）……40
子猫救出大作戦（7／7）……52
ヒフアズお泊り会（1／2）……60
ヒフアズお泊り会（2／2）……69

子猫救出大作戦（1／7）

――キヴォトス。

連邦生徒会を中心とし、数千の学園が寄り集まって作られた、巨大な学園都市である。

この学園都市キヴォトスでは、なによりも生徒の自主性を重んじている。

その方針はある種の極みに達しており、生徒たちには各学園の運営までもが一任されていて、それぞれの学園には学園が統治する自治領が存在する。

もしも自治区でなにか問題が起きれば、その学園の風紀委員やそれに類する委員会の生徒が対処に当たり、その後の後処理もすべて学園にて生徒が行う――。

いわば一つ一つの学園が、それぞれの生徒会を頂点とした、小さな国のようにして機能していた。

……さて、そんなキヴォトスにはトリニティ総合学園と呼ばれる学校が存在する。

文武両道を掲げ、歴史と伝統が息づいたトリニティ総合学園は、数ある他の学校と比べても破格の規模を誇る、いわゆるマンモス校だ。

同等の規模で、トリニティ総合学園とは双璧をなすと言われるゲヘナ学園は不良が多いことに定評がある一方で、トリニティ総合学園は上品で奥ゆかしい生徒が多い。

ちなみにこの二つの学園はすこぶる仲が悪く、互いにいがみ合う関係である。

閑話休題。そんなトリニティ総合学園には、正義実現委員会と呼ばれる委員会が存在する。

一風変わった名前ではあるが、要するに他の学園で言うところの風紀委員だ。

トリニティ総合学園の武力の象徴でもあり、その名に掲げる正義にかけて、正義実現委員会は今日もトリニティの安全を守ってくれていた。

ここは、そんな正義実現委員会の由緒正しき教室……から少し離れた廊下の角。
そこには現在、なにやら廊下の奥の方からコソコソとやってきた、三人の女子生徒の姿があった。
その女子生徒たちは、ちょうど教室からは見えない角の向こう側で立ち止まると、三人のうちの一人、銀髪の少女が角から慎重に顔を出す。
正義実現委員会の教室の扉が閉じられていること、周囲に誰もいないこと。それらを素早く把握した銀髪の少女は一旦顔を引っ込め、続けて今度は残りの二人の方を振り返った。
二人のうち片方、平凡そうな少女は不安と困惑に満ちた表情を浮かべ、対称的にもう片方のお淑やかそうな少女はニコニコと楽しそうに微笑んでいる。
「よし。ちゃんとついてきているな」
銀髪の少女は二人の様子を確認するとコクンと頷き、再び教室の方に向き直った。
扉の上に設置された『正義実現委員会』と記されたネームプレートを力強く睨みつけ、持っていた銃を構える。
「ではこれより――正義実現委員会を襲撃する。準備はいいな、二人とも」
「もちろん大丈夫ですよ～」
「あ、あうぅ……」
……三人が着ている純白の制服と十字架の校章の意匠は、彼女たちがトリニティ総合学園の生徒である証にほかならない。
決して、そう決して、トリニティと犬猿の中にあるゲヘナの生徒などではない。
三人とも全員、まごうことなきトリニティ所属の生徒であった。
……ここはトリニティ総合学園。
上品で奥ゆかしい生徒が多い……多いが……。
……一部例外もいる、キヴォトス有数のお嬢様学校である。

三人のうち、唯一襲撃に乗り気でなかった平凡そうな少女――阿慈谷（あじたに）ヒフミは、なぜこんなことになってしまったのかと、頭を抱えながら今までの出来事を思い返していた。

事の発端は、今から二時間ほど前に遡る。

ちょうどその時間、いつも通り授業を終えたヒフミは、他の大多数の生徒と同じく自らの所属する部活動に勤しむべく、同じ部活の仲間である銀髪の少女――白洲（しらす）アズサと合流して自らの部活の教室に向かっていた。

ヒフミとアズサが所属する部活動は補習授業部と言い、その名の通り放課後に補習や自習を行う部活である。

この部活は本来、落第に匹敵するほどの成績不振者が現れた場合に、特例として限定的に発足し、その成績不振者を強制的に入部させる部活だ。

そう聞くとヒフミもアズサも勉強ができなさそうに思えるが、ヒフミに関しては別にそんなことはなく、成績は平均程度だったりする。

そんなヒフミが補習授業部なんてものに入れられてしまっている理由は、なんてことはない。

単にテスト当日に、ついうっかり好きなマスコットキャラクターのゲリラコンサートに行ってしまっただけである。いやなにやってんだ。

ちなみにアズサは普通に勉強ができない。

ヒフミはそんな補習授業部の部長の任を任されていた。

好きなもののためなら授業もテストもサボタージュすることを辞さない、そこはかとない問題児の側面もあるものの、基本的にヒフミの性格は真面目である。

今日も今日とて補習授業部の部長として、他の部員の皆と教え合いながら勉学に励むつもりであった。

しかし補習授業部の教室に向かう道すがら、困り果てた様子で廊下をオロオロと彷徨うクラスメイトを見かけたことでヒフミは教室へ向かう足を止めた。

「――猫さんですか？」
「そうなんです。さっきから姿が見当たらなくて……」
　なにか力になれることはないかと話を聞いてみれば、なにやら連れてきていた飼い猫が目を離していた隙に迷子になってしまっていたようで。
「まだ幼い子なので、とても心配で……ヒフミさんも、もし見かけたら連絡していただけませんか？　白い毛並みのおとなしい子です。黄色い首輪をしています」
「白い毛並みの子猫さんですね。わかりました。私の知り合いの方にも見かけていないか声をかけてみますね」
「ありがとうございます。お願いします、ヒフミさん」
　飼い猫を探しに違う場所へ立ち去ったクラスメイトを見送り、ヒフミは会話を傍観していたアズサの方に振り向く。
「アズサちゃんは、見かけたりしてませんよね？」
「ああ。ヒフミも知っての通り、放課後はすぐにヒフミと合流した。その間に件の猫の姿は見ていない」
「ですよね……猫さん、大丈夫でしょうか……」
「トリニティは他の学園と比べれば治安はいい。失踪したての今のところは、まだ大丈夫なはず」
「い、今のところはですか。できれば未来の保証もしていただけると助かるのですが……」
「残念だけど、物事というのはいつ何時なにが起こるかわからないものだ。楽観視が過ぎると足元をすくわれかねない。こういう時は最悪の事態まで想定しておいた方がいい」
「最悪の事態ですか!?　あ、あうぅ。そんな……子猫さんが悲惨な目に遭ってる未来なんか想像したくありません……」
「……そうだね。それは私も同意。手遅れになる前に、早く保護して飼い主に届けてあげよう」
「て、手遅れって、怖いこと言わないでくださいアズサちゃん……でも、そうですね……とりあえず、今日の補習授業部の活動は中止ということで、お二人にもモモトークで連絡しておきましょう。それから

猫さんの特徴も知らせなきゃですね」
ヒフミは自分の端末を取り出し、ここにいる自分とアズサ以外の補習授業部のメンバー二人にメッセージを送る。
内容は今ヒフミが自分で言った通り、今日の部活動を中止にすることと、子猫を探していること、そしてその子猫の特徴だ。
連絡をした後は端末をしまおうとしたが、すぐにピコーンと端末が反応を示す。
見れば二人のメンバーのうち片方、下江（しもえ）コハルからすでに返信が来ていた。
『猫探しで活動中止なんてずいぶん呑気ね。でも、わかったわ。子猫については私も気にしとく。見かけたら連絡するわ』
ヒフミは『お願いします』とだけ返して、今度こそ端末をしまった。
「それじゃあアズサちゃん、行きましょうか」
「子猫の居場所に当てはあるの？　ないなら手分けした方がいい」
「そうですね……ではアズサちゃんは向こう側から庭園を回って、校舎に入ったら上の階に上がって見て行ってくれませんか？　私は反対側から行きます。最上階で合流しましょう」
「わかった。白洲アズサ、作戦行動を開始する」
妙に物々しいアズサの返事に苦笑しながら、ヒフミはアズサと別れて猫探しを開始した。
しかし結果だけを言えば、その成果は芳しいものではなかった。
通りすがった知り合いにも子猫を見ていないか聞いたりもしてみたが、フルフルと首を横に振るばかり。
結局なにも得るものがないまま、ヒフミは最上階までたどりついてしまった。
「来たか、ヒフミ」
先に合流地点に到着していたらしいアズサは、柱に寄りかかって腕を組んでいた。
なにやら難しい顔をしている。
「こちらに子猫の姿はなく、聞き込みもしてみたが目ぼしい情報は掴めなかった。ヒフミ、そちらは？」

「私もです……やっぱりそう簡単には見つからないですね……」
「……いや、学園で行方不明になった猫について、いくらなんでもここまで目撃証言がないのはおかしい。もしかしたら、猫はもうこの学園にはいないのかもしれない」
「学園の外に行っているかも、ということですか？　そうなるとさすがに見つけることは難しいですが……」
「うん、そうなっていたらお手上げ。トリニティの広い自治区を私たち二人だけで探し回るのは無理がある。だから……うん。あるいは今はその可能性は敢えて省いて、もう一つの可能性に賭けるべきなのかも……」
「もう一つの可能性ですか？」
　曖昧な表現にヒフミが首を傾げると、アズサは考え込むように自らの顎に手を添える。
「目撃証言がないということはおそらく、近くにいないか、いるとしても囚われているかの二つだ。前者の場合の想定は、さっき言った通りこの際一旦捨て置く。そして仮に後者だとすれば……その猫は警備員か、この学園にある部活動のどこかにすでに保護、いや囚われている可能性が非常に高い」
「そ、そこは保護の方が正しいと思いますが。でも、なるほど。そうですね、それなら確かに情報はほとんど出回りませんし、アズサちゃんの言う通りかもしれません」
　黄色い首輪をした、白い毛並みの飼い猫。
　一目で飼い猫とわかるそれが学園の敷地内で悠々と出歩いていたなら、安全のために保護されていても不思議はない。
　その場合、きっと子猫はいずれ飼い主の元に渡るので、ヒフミやアズサがなにかしなくても大丈夫なはずではあるが……。
「部室を回ろう。学園の外に出ていないなら、警備室か、この学園の部活動のどこかの部室か教室にいるはず」
「そうですね……そうしてみましょう」
　なにもしなくても大丈夫かもしれなくても、できることなら早く再会させてあげた方が、きっとクラスメイトの子も安心できるだろう。

「今度も手分けをして探しますか？」
「いや……悪いけど、私はまだこの学園の地理には疎い。どこで戦闘になっても良いように地形については把握してるけど、だいぶ広いから、どこがどの部室かまでは完全に理解しきれてないんだ。できればヒフミに先導を頼みたい」
「そういえばアズサちゃん転校生でしたね。最近は馴染みすぎてすっかり忘れちゃってました」
　ヒフミは自分の胸の前に手を置くと、ドーンと胸を張る。
「わかりました、そういうことなら任せてください！　えへへ、この際ですから、アズサちゃんに学園の案内もしてあげますね！　補習授業部を卒業した後のためにも、どんな部活があるか今のうちに知っておいた方がいいでしょうし！」
「……私は別に、ずっと補習授業部でも構わない。ヒフミたちといるのは、そう悪い時間じゃないから」
「え、えへへ、そうですか？　でもその、そう言ってもらえるのはとても嬉しいのですが、補習授業部は成績を上げて皆で卒業するための部活なので……」
　一緒にいて楽しいのはヒフミも同じ気持ちではあるのだが、いつまでもそのままというのは、いかんせん補習授業部の趣旨とは異なってしまう。
　補習授業部は「成績の振るわない生徒たちを救済すること」こそが目的であり存在意義なのだ。
　いつまで経ってもこれが果たされないということは、とどのつまり落第になるということで……。
　特にコハルは、補習授業部を卒業しなければ本来の希望の部活――正義実現委員会に復帰できないとも通達されている。一刻も早く補習授業部を卒業したいことだろう。
「まずは、そうですね……文学系の部活から尋ねてみましょうか。最初は純文学部に寄ってみましょう！」
　部活、サークル、委員会と細かい種別はあるが、総じて部活動の範疇である。

というわけで、部活動巡りを始めた二人。
トリニティほど大きな学園ともなると、部活動の数も凄まじい。
それらを回るのはなかなかに大変ではあったが、苦ではなかった。
トリニティの生徒は基本的に皆、真面目で善良なのだ。
せっかく来たのだからとおもてなしをしてもらえたこともあれば、転校生のアズサのために懇切丁寧に部活動の説明をしてくれたり、体験させてもらえることもあった。
物珍しさもあってか、アズサもどことなく楽しそうにしてくれていたので、ヒフミは案内のしがいがあったと感じている。
……しかしながら、そんな有意義な時間を過ごすことができた一方で、依然として子猫の居場所を特定するには至ってはいなかった。
警備室にも足を運んでみたが、それも徒労に終わっていた……。

子猫救出大作戦（２／７）

「ありがとうございました」
　お辞儀をして扉をしめて、最後に回った部室を出る。
　ヒフミとアズサは少し気落ちした足取りで、並んで廊下を歩いていた。
「結構な数の部活動は回りましたが……猫さん、見つかりませんね……」
「進展が一切ない。これは良くない傾向だ……ここらでなにか新しい情報が手に入らないと、完全に打つ手がなくなる」
「まだ回ってない部活動はたくさんありますが……あうぅ、もし全部回っても見つけられなかったなら、本当に学園の外に……」
「……首輪がある以上、逃げ出した飼い猫であることは一目瞭然だ。もしもそれがトリニティの生徒の飼い猫だとバレてしまったなら、人質代わりに誘拐されることもあるかもしれない……」
「ひ、人質ですかっ!?」
　あまりにも物騒な発言、最悪の想定に、ヒフミは思わず甲高い声を上げた。
　アズサはコクリと頷き、至って真剣な眼でヒフミを見つめ返す。
「トリニティの生徒は、身代金目的で誘拐されることがたびたびあると噂で聞いた。子猫なら人よりもさらに扱いやすい。決して無視できる可能性じゃない」
「そ、そんなの猫さんがあまりにも可哀想です。なにも悪いことなんてしてないのに……」
「真面目な善人が損をし、不真面目な悪人が得をする。vanitas vanitatum（ヴァニタス・ヴァニタートゥム）……すべては虚しく、世の中は往々としてそんなものだ。けど……」
「だ、だとしても！　わ、私は嫌です……それに、猫さんは人ですらないんですから、そんな人の都合に巻き込んじゃうのは酷な話です……」
「……うん。ヒフミならそう言うと思った。私も全面的に協力するか

ら、早く見つけてあげよう」
二人で顔を見合わせて、一刻も早く見つけなければと意思を通じ合わせる。
そうして足早に次の部活へと向かおうとしたところ、ふと、二人にかけられる声があった。
「あら？　ヒフミちゃんとアズサちゃん？　こんなところでどうしたんですか？　補習授業部の教室はそっちじゃありませんよ？」
お淑やかでどこか色香を感じさせる、ゆったりとした音色だった。
その聞き慣れた声にヒフミとアズサは足を止める。
この声は、ヒフミとアズサの知り合い――コハルと並ぶ補習授業部のもう一人のメンバー、浦和（うらわ）ハナコのものに違いない。
毎日放課後に一緒に部活動に勤しんでいる仲なので、聞き間違えることはない。
ヒフミは振り返りながら、かけられた声に返事をする。
「あ、ハナコちゃん。えっとですね、モモトークで連絡しましたが、今日の補習授業部の活動は中止になりまして――あれっ!?　なんで水着なんですかっ!?」
もしかしたらちゃんと送れていなかったのかも、と申しわけなく思いながら返事をしていたのだが、少し遅れてその奇天烈な格好に素っ頓狂な声を上げる。
ハナコは持っていた鞄から端末を取り出すと、パチパチと目を瞬かせた。
「これは……なるほど、だから誰も教室に来なかったんですね。おそらく水着に着替えている最中に連絡が……返信できなくてごめんなさい」
「あ、い、いえ。それに関してはむしろ急に中止にした私の方が謝らなきゃいけないくらいで……じゃ、じゃなくてですね!?　どうして水着に着替えてるんですか!?」
ヒフミの言う通り、今のハナコは水着を着用していた。
一応補足しておくと、ここは別にプールでもなければ更衣室でもない普通の廊下である。

至極当然なことではあるが、水着が制服だというわけでもない。いやまあ着ている水着自体は学校指定のものだが。
今はヒフミたちしかいないが、普通に他の人も通るし、こんな姿を正義実現委員や警備員に見つかれば間違いなく補導されるだろう。
とどのつまり変質者であった。
「ふふっ。なぜ水着なのか……そうですね。普段皆で過ごしている広い空間、そして誰が来るかわからない状況で、服を脱いで開放的な格好をする……そういうのって、なんだか背徳的でドキドキしませんか？　ヒフミちゃんはどう思います？」
「へ!?　私ですか!?　わ、私はその、気まずいだけでドキドキなんてしないと思いますけど……」
「……？」
ヒフミの横で話を聞いていたアズサは、ハナコの質問に対して心底不思議そうに小首を傾げていた。
質問の意図がまるで理解できないと言った様子だ。アズサは純情な子だった。
言い様からして、おそらくハナコは水着姿のまま補習授業部の教室で他の皆を待っていたのだろう。
連絡が行き届かず、無駄な時間を使わせてしまった申し訳なさと、なぜそんな格好で待っていたのかという困惑が入り乱れる。
そこへさらにハナコの爆弾のような問いかけも相まって、ヒフミの目はグルグルと渦を巻いてしまっていた。
「ふふっ。本当に、ドキドキしませんか？」
ヒフミが冷静さを失っている様子を見て取ると、ハナコは瞳を覗き込むようにしながら一歩ずつヒフミに詰め寄った。
なにかイケないものににじり寄られている感覚がしたヒフミは無意識に後ずさっており、気がついた時には、トンと廊下の壁に背中がついてしまっていた。
逃げ場をなくしたヒフミとの距離をハナコはさらに縮めて、ヒフミの耳元に自分の口を寄せる。
ハナコの吐息を間近で感じ、ヒフミは反射的に身を縮こませた。

「欲望の形というものは自分では意外とわからないものですから。実際にやってみたら、案外ヒフミちゃんもハマってしまうかもしれませんよ？」
「ふぇ!?　わ、私、そういうのはちょっと……!?」
「では、早速実践してみましょう。大丈夫です。この道の先達として、私がヒフミちゃんに手取り足取り、いろんなことを教えてあげますから……ふふ」
　戸惑うヒフミをよそに、ハナコはヒフミの制服のボタンに手をかける。
（た、助けて……助けてください、アズサちゃん……！）
　このままだと本当にハナコと同じ水着姿に着替えさせられてしまう。
　そう直感したヒフミは恥ずかしさで顔を赤らめながらも必死に、それはもう必死に視線でアズサに助けを乞うた。
　それが通じたのかどうかは定かではないが、アズサはようやく状況を理解したとばかりの得心が行った様子で頷くと、二人をなだめるようにピシャリと告げた。
「二人とも。制圧術の訓練はいいけど、今は子猫の救出が先。未だ子猫の状況が不明確な以上、あまり余計な時間は使っていられない」
　どう見ても制圧術の訓練ではなかったが、ヒフミに詰め寄るハナコの行動、そして実践や教えてあげますと言った数々の発言から、アズサはそんな答えを導き出したらしい。
　アズサの推測は的外れではあったものの、主張自体はもっともだと感じたのだろう。
　ハナコは少し残念そうにヒフミから体を離す。
「そういえばメッセージにそんなことも書かれていましたね……しかたありません。残念ですがヒフミちゃん、続きはまた今度ということで」
「で、できれば続きはない方が嬉しいのですが……ひとまず助かりました……」
　ヒフミはホッと息をつくと、また同じような目に遭ってもすぐ助け

てもらえるよう、さり気なくアズサの隣に移動する。
ハナコはそのヒフミの行動に気がついてはいたが、口に出して指摘することはしない。
むしろ、普段以上に距離を詰めて並んだヒフミとアズサの二人がとても仲良しに見えて、微笑ましそうに頬に手を当てた。
「それにしても迷子の子猫ちゃんですか。思い出したのですが、そういえば補習授業部の教室についたばかりの頃に窓から白い毛並みの子が見えましたね」
「えっ!? 本当ですかっ?」
「もちろん本当ですよ。庭園を不安そうに一匹で歩いていて……ちょうど通りかかったハスミさんに保護されていました」
「え、ハスミさん……ですか?」
「はい。正義実現委員会、副委員長のハスミさんです」
子猫の目撃証言と、その子がどうなったか。
数々の部活動を回ってもまったく得られなかった情報の一端を、ヒフミはようやく手に入れることができた。
「そうですか。正義実現委員会に……ふぅ、よかったです。猫さんが無事そうで……」
手遅れだとか誘拐だとか、今まで散々嫌な想像を繰り返してきたが、やっと手に入った子猫が無事だろうという情報にヒフミはホッと胸を撫で下ろす。
正義実現委員会はトリニティの武力の象徴ではあるが、その名の通り正義を為すための組織だ。
なんの罪もない保護した子猫に手荒な真似をしたりはしない。なんなら飼い主を探すと言ったことまでしてくれそうだ。
ヒフミの中では、これでこの件は解決したも同然だと思っていた。
けれどそんなヒフミとは反対に、ヒフミの隣に立っていたアズサは険しい顔になって瞼を閉じた。
「そうか。正義実現委員会に……確かに、正義実現委員会はまだ回っていなかった。でもまさか、よりにもよって正義実現委員会に囚われているなんて……」

「えっと……アズサちゃん？　どうかしたんですか？　正義実現委員会に保護されているなら、きっと無事だと思うのですが……」
「そうとは言い切れない」
　ヒフミの推測を甘い考えだとばかりにバッサリ切り捨てると、アズサはその宝石のような眼でヒフミを見据えた。
「ヒフミは聞いたことない？　正義実現委員会の委員長……その苛烈な戦いぶりを見た生徒は皆、ＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）に陥って、数週間入院することになったって」
「その噂は私も聞いたことはありますが……」
　正義実現委員会の委員長――剣先（けんざき）ツルギ。
　好戦的で暴力的な正確であり、気に入らないものがあったらとりあえず壊してから考えるタイプ。
　トリニティの戦略兵器の異名を持ち、その驚異的な戦闘能力と危険性を評した噂は数知れない。
　トリニティに住む者であれば……否。キヴォトスに住む者であれば、彼女の存在を知らない者などほとんどいないだろう。
「実際に戦ったわけでもない者でもそうなんだ。そんな光景をまだ幼い子猫がもしも目にしてしまったら。その心に癒えない傷を負うことになる。早く救出してあげるべきだ」
「えっと……さすがに猫さんを戦場に連れて行くことはないと思うのですが……正義実現委員会の方々も、その辺は考慮してくれると思いますし」
「でも、可能性はゼロじゃない。たとえば、飼い主探しの途中とか。正義実現委員会に恨みを持ってる不良生徒だって相当な数だ。意図しないタイミングで襲撃されて、戦闘が発生することだってあるかもしれない」
　いくらなんでも悪い方向に想像を飛躍しすぎではないかとも思ったけれど……絶対にありえないとまでは言い切れない。
「……うぅ。そう、ですね。正義実現委員会……あまり気は進みませんが、教室を尋ねてみましょうか。事情を話せば、きっと猫さんを引き渡してもらえるはずです」

正義実現委員会の部室はトリニティの生徒たちからも少し恐れられているような場所だ。
その大体の原因は、やはりツルギに付き纏う数々の噂話にあるのだが……ともあれ、多少なりとも恐れているのはヒフミも例外ではなかった。
それでも子猫のためであればとヒフミは奮起する。
しかしアズサは再び否定するように、ふるふると首を振った。
「それも得策とは言えないかな。だってヒフミのその行動はつまり、あの正義実現委員会に下手に出て頭(こうべ)を垂れ、借りを作るってこと。あの正義実現委員会に」
「ア、アズサちゃん？　ちょっと言ってる意味がわからないのですが……」
「ただでさえ私たちはやつらから目をつけられているのに……そうなったら、いったいどんな払いがたい対価を要求されるかわかったものじゃない。私は反対だ」
「えっと……その、ちょっと言いにくいのですが、目をつけられているのは主にアズサちゃんとハナコちゃんの普段の行いのせいだと思いますよ……？」
アズサは見た目は小さくて可愛らしいが、そのお人形みたいな容姿に反して非常に好戦的だ。
特に正義実現委員会とは確執でもあるかのごとく、些細なことでしょっちゅう衝突している。
ハナコも見た目は一見上品でお淑やかそうに見えるが、中身は相当アレである。
学園の敷地内を大胆な格好で出歩くことで補導された回数数知れず。今もなんか水着着てるし。
毎回のように問題を起こしまくっている二人が正義実現委員会から目をつけられるのは必然というか当然と言えた。
「そもそも借りというほどのものにはならないような……？　私たちの誰かが飼ってる猫というわけでもないんですし、普通に引き取らせてもらえる気が……」

「いや、正義実現委員会に頭を下げるなんて絶対に良い結果は生まない。それに頑迷な正義実現委員会のことだ。一度保護した以上は自分たちの仕事の領分だからって、話も聞かず突っぱねるに決まってる」
「そ、そうなんですか……？」
「うん。そう。連中と何度も戦ってるし、連中のことは熟知してる。絶対にそうなる」
どう聞いても一方的な言いがかりというか、凄まじい偏見に思えたが……ヒフミは正義実現委員会についてそこまで詳しいわけじゃない。
アズサちゃんがここまで言い切るからにはそうなんでしょうか……？　と、ちょっと疑問に覚えつつも、ヒフミはとりあえずアズサを信じることにした。
「そこで……私に一つ、良い提案がある」
いかにも自信がありそうに、アズサが人差し指を立てる。
……今までの経験が警鐘を鳴らしたように、ヒフミはなんだか嫌な予感がしていた。
こうしてアズサが自分からなにか行動を起こそうとする時は、大抵なにか物騒な事態に発展するのである。
ヒフミと同様にハナコもなにかを察知したようだったが、彼女はヒフミとは真逆で、面白そうなことになってきましたねと言いたげにニコニコと頬を緩めていた。
「そ、その、アズサちゃんが考える良い案というのはいったい……？」
恐る恐るヒフミが問いかけると、アズサは至極真面目な表情で答えた。
「――私たち三人で、正義実現委員会を襲撃する。私たちの手で正義実現委員会の教室から子猫を救出し、飼い主のもとに届けてあげよう」
「しゅ、襲撃っ!?」
そっちの方が良い結果は生まないと思うんですが!?
思わず浮かんだヒフミのそんな心の叫びは……いやまあ実際に口

にも出したのだが、残念ながらアズサの心には届かなかった。
かくしてヒフミの嫌な予感は的中し、いかにも乗り気な様子の他の二人に頭を悩ませることになるのであった。

子猫救出大作戦（3／7）

「――じゃあ、三、二、一、〇（ゼロ）の合図で飛び込もう。突入したら私とハナコが先制攻撃を仕掛けるから、ヒフミは殿（しんがり）をお願い」

現実逃避気味に今に至るまでの経緯を思い返していたヒフミは、そんなアズサの声にハッとして顔を上げた。

見れば、アズサとハナコの二人が廊下の角から身を乗り出して正義実現委員会の教室がある方向を覗いている。

なお、ハナコはあの後すぐに制服に着替えてくれた（というか着替えさせた）ので、今は水着ではない。

これからの戦闘行動に備え、アズサが自分の銃の状態を素早く確認する。

ちなみにこういった銃火器はキヴォトスで暮らす生徒であれば誰であれ所持しているものなので、それ自体は特に問題ではない。

キヴォトスの生徒は頑丈なので、銃弾が当たったくらいでは死んだりしないのだ。

それはそれとして滅茶苦茶痛いが。

「残弾数確認完了。安全装置（セーフティ）、解除（アンロック）……じゃあ行こう。突入前のカウントダウン開始。三……二……一……――」

「ま、待ってください！」

このまま放っておいたら二人は……否。自分を含む三人は、本当に正義実現委員会に真正面から喧嘩を売りに行くことになるだろう。

ここを逃したら、もう引き返すことはできない。

そんな焦燥感に駆られたヒフミは、今にも飛び出さんばかりのアズサを咄嗟に呼び止めた。

「どうしたの？　ヒフミ。もしかして、まだ安全装置を解除してなかった？」

「あ、あう……」

コテン、とアズサが可愛らしく小首を傾げる。小さな体躯と相まって、まるで無害な小動物のようだ。

その無垢な仕草にヒフミは一瞬言葉を詰まらせてしまうものの、こ

のままだとまずいことになるのは火を見るよりも明らかである。
　戸惑いを振り払うように頭をブンブンと左右に振ると、今にも飛び出さんばかりのアズサにヒフミは必死に説得を試みた。
「こ、ここに来るまでに何度も言いましたが、やっぱり正義実現委員会を襲撃するのはまずくないですかっ!?」
「……？　なにがまずいの？　ああ、三人は戦力的に心もとないという意味？　大丈夫。正義実現委員会が相手でも、私は一人で三時間は立ち回れた。ヒフミと一緒だった時はさらに甚大な被害を負わせられた……今日はハナコもいる。三人もいれば今までよりもっと長く、うまく立ち回れる。もしかしたら正義実現委員会を壊滅させることもできるかもしれない」
「か、壊滅っ!?　壊滅させてどうするんですか!?　そんなことしたらトリニティが大変なことになっちゃいますよっ!?　というか、さすがにそこまでのことはできませんしやりません！」
「あらあら。お二人とも、そんな楽しそうなことをしていらしたんですね？　言ってくれれば私もお手伝いしましたのに」
「あうぅ……ち、違うんです、違うんですハナコちゃん。あれはその、いわゆる不可抗力と言いますか……」
「あの時はヒフミの提案で学園の戦車を盗んで海に行こうとしたんだ。ヒフミの戦車の操縦技術には目を見張るものがある。子猫を救出したら、また戦車を奪うのも良いだろうね」
「あら、ヒフミちゃんの提案ですか？　ヒフミちゃん、思っていたより大胆な方だったんですね？」
「だ、だから違うんですぅ！　なにもかも全部誤解で……あ、あうぅ……」
　収拾がつかない会話のとっ散らかり具合に、ヒフミは頭を抱えてうずくまった。
　また現実逃避したい気持ちでいっぱいだったが、そんなことをしたら今度こそ本当に二人はヒフミも巻き込んで正義実現委員会に襲撃を仕掛けるだろう。
　それだけは絶対に避けたかったヒフミは、なにか二人を説得できる

手立てはないのかと全力で思考を巡らせる。
ここまで来たら、単純に真正面からやめた方がいいと言ってもおそらく効果はない。
というかここに来るまでにも散々そうしてきたが意味がなかった結果が今である。
なにか、説得に応じるに足るだけの理由付けが必要だ。
たとえば、襲撃をした場合に生じる致命的な問題を見つけ、それを理屈的に説明することができれば……。
「っ、そ、そうです！　襲撃なんて仕掛けたら、中にいると思しき猫さんが流れ弾で怪我をしてしまうかもしれません！　この襲撃の目的はあくまで猫さんの安全確保……！　その危険性を考えないのは本末転倒ではないですかっ!?」
二人を説得するに足る正論。
なにがなんでも正義実現委員会に捕まりたくない思いからその答えを見つけることが叶ったヒフミは、一心不乱に二人にそれを訴えた。
「……」
「……」
その甲斐あってか、二人はヒフミの言葉を受け入れるように黙り込んだ。
ヒフミもギュッと両手の拳を握って、懇願するような涙目で二人を見つめる。
しばらくすると、アズサが反省したように息をついた。
「……なるほど。ヒフミの言う通りだ。正義実現委員会への私怨から、少し視野狭窄になっていたのかも。これはまた厳しい訓練を積まないといけないかな……」
「く、訓練はともかく、そうです！　猫さんの安全のためにも、この襲撃は取りやめるべきです！」
「うん。ヒフミの言いたいことはよくわかった。ヒフミの言うことはもっともだし、襲撃はやめることにする」
「本当ですかっ？　よ、よかったです……ふぅ・これでなんとか、正義

実現委員会に捕まることは避けら」
「救出対象の安全を最優先に据えて、囮作戦に切り替えることにしよう」
「れて……ないですねっ!?」
　ちょっと残念そうにしていたハナコが、再び楽しそうに頬に手を当てていた。
「お、囮作戦!?　どうしてそんな発想に至ったんですか!?　襲撃はやめるんじゃなかったんですかアズサちゃんんっ!?」
「正確には襲撃じゃなくて、強襲作戦をやめる。ヒフミの言った通り、それだと子猫の安全を保証できないから。そしてそれを考慮して作戦を組み直した結果、正義実現委員会から子猫を救出するには囮作戦が適正だと判断した。まだなにか問題でもあるの？　ヒフミ」
「も、問題しかありませんよ!?　囮作戦ってことは、その、えっと……」
「……？」
「あ、あうぅ……」
　アズサは別に、ヒフミをからかいたくて冗談を言っているわけでも、弄りがいがあるから意地悪を言っているわけでもない。
　ヒフミの意見を聞きたい。ヒフミの力を借りたい。もし修正点があるなら挙げてほしい。
　本気でそう思って、本気でそう言っているのである。
　しかしそんな純真で純粋なアズサだからこそ、こんなことで危ない目に遭ってほしくないという気持ちもあった。
　そしてそんな自分の感情を自覚した瞬間、ピコン！　とヒフミの頭の中で電球が点灯する。
「そ、そうです！　囮作戦ってことは、誰かが犠牲になるってことですよねっ？　そんな作戦は補習授業部の部長として看過できません！　そう……ぶ、部長として！」
　今度思いついたのは、さきほどのような理屈的な否定論ではなく、理屈などなにもない感情論。
　性格からしてアズサに対して感情的な説得は効果が薄いだろうが、部長という上の立場を強調すれば、軍人気質なアズサは従ってくれる

かもという密かな期待があった。
もっとも、ヒフミは部長がどうだとか普段はまったく気にしていないのだが。
そして、そんなヒフミの打算は成功する。
明確に部長としての立場を示しての発言に、アズサは少々反論しづらそうに口を噤ませる。
「……元々、囮作戦は囮の安全が保証できないもの。囮以上に優先しなきゃいけないものがあるからには、ある程度しかたないことだと思うけど……ヒフミの言う通り、立場的にこの部隊のリーダーはヒフミか。そのヒフミが言うなら……でも他に子猫の安全を保証できるような作戦なんて……」
悩ましそうにブツブツと呟くアズサ。
一見冷たそうにも見えるアズサが実は可愛いもの好きであることを知っていたヒフミは、これをチャンスだと感じた。
逡巡している今であれば、部長としての立場、そして可愛い子猫の安全が第一だということを理由に畳みかければ、正義実現委員会と敵対しなくても良くなるかもしれない。
正義実現委員会にきちんと事情を説明して、子猫を引き渡してもらう。
アズサは渋りに渋るだろうけれど……それを納得させられなければ、ヒフミたち三人に正義実現委員会に捕まる以外の未来はないのだ。
正義実現委員会に捕まるのは嫌だ。処罰を受けることになるのも嫌だ。尋問も拷問も嫌だ……！
どうにか説得を！
ヒフミは気合いを入れ直した。
「では、私が囮になりましょうか？」
「はい……はいい!?」
しかしその矢先、思わぬ伏兵ことハナコがそんな提案を唐突に持ち出したことでヒフミの『アズサちゃん説得作戦』はガラガラと音を立てて崩れ始める。

「ハ、ハナコちゃんっ!?　今の話ちゃんと聞いてましたか!?」
「もちろん聞いていましたよ。ヒフミちゃんは部長として、囮の役目を負う人が危険な目に遭うのが看過できない。そういう話ですよね？」
「えっ、あっ、はい……そ、それもあるのですがっ、それ以前に私は襲撃自体に反対で……！」
「ふふっ。大丈夫ですよ、ヒフミちゃん。私に良い策があるんです」
　襲撃事態に反対だという意見はまるで聞こえていないようで、ハナコは嬉々として囮役を実行しようとしていた。
「うぅ……で、でも……」
　なおも渋ろうとするヒフミの肩に、ポンとアズサが手を置いた。
「ヒフミ、ここはハナコに任せてみよう。危険だとわかりきっている囮になると自分から言い出すには、相当な覚悟が必要だ。無下にはできない。それに……ここまでの余裕を見せているからには、きっとその策に自信があるんだろう」
「あ、あうぅ……」
　……これ以上はもう、どうにもならなさそうだった。
　アズサ一人ならまだしもハナコまで加わってしまったら、ヒフミ一人では説き伏せきれない。
　ヒフミはついに諦めて、ガックリと肩を落とした。
「うぅ……わ、わかりました……でもどうか、正義実現委員の人に銃を向けたりはしないでくださいね……？」
「ふふふっ。はい、わかりました。部長の命令とあらば～」
　襲撃そのものを取りやめることは、もう不可能だ。
　ならば、できる限り騒ぎを起こさずに正義実現委員会の教室から迅速に猫を連れ出すこと。ここまで来たらもう、そこに焦点を当てるしかなさそうだ。
　ずっと否定的だったヒフミからようやく作戦行動の許可が下りたからか、ハナコは今にも鼻歌でも歌い出しそうな上機嫌さで廊下を飛び出した。
　では行ってきますね、と。悠々と正義実現委員会の教室へと足を進

める背中からは、アズサが言っていた通りの余裕が溢れていて、自身が立てた策に本当に自信があるのだろうということが察せられた。
加えてヒフミが二度に渡って刺した釘が功を奏したのか、彼女は本当に武器を使うつもりはないようだ。
今にも攻撃を仕掛けそうに銃を構えているアズサと異なり、彼女の銃は未だスリングで肩にかけられている。
「ごめんくださーい」
しばらく廊下を歩いて教室の前にたどり着くと、ハナコは物怖じせずにその扉を開いた。
ヒフミとアズサが隠れている廊下の角は教室からそれなりに離れていたので、ここまで離れるとハナコの声はほとんど聞こえない。
正義実現委員会の扉が閉じてハナコの背中が見えなくなる様子を、ヒフミは不安そうに、アズサは彼女の覚悟を汲み取るような眼差しで見送るのだった。

子猫救出大作戦（４／７）

正義実現委員会の教室では、一人の女子生徒が膝の上に座る子猫を優しげな手つきであやしていた。

「ふふ、可愛いですね……あ、そちらは危ないですから、こちらに……っ!?」

――ガチャリ。

微笑ましいものを見る目で子猫を撫でていた生徒こと羽川（はねかわ）ハスミは、予想だにしないタイミングでの来訪者にビクッと肩を跳ねさせながら、音がした教室の入口の方に振り返る。

そこに立っていたのはハナコだ。

ハナコは普段生真面目な印象が強いハスミの意外な行動を目の当たりにして、パチパチと目を瞬かせる。

「ハ、ハナコさん……？　な、なにか正義実現委員会に用事ですか？」

「……ふふっ。ハスミさん、猫がお好きなんですか？」

面白いものでも見つけたかのように、ハナコはお淑やかながら意地悪そうな笑みを浮かべている。

「え、ええ、まあ……嫌いではありませんが……」

大好きなんだろう。ハナコと話しながらもハスミの手は機敏ながら優しい手運びで子猫を撫でている。

彼女の腕の中で、子猫はとても気持ちよさそうに寝転んでお腹を見せていた。

「こ、こほん！　それで、本日はどのようなご用件で……？　ご覧の通り、今は私以外の委員は出払っていますが……」

子猫を甘やかしていた件で追求されると分が悪いと感じたハスミは、強引に話題を本題に戻す。

ハナコは本音を言えばもっと子猫の件でハスミで遊び……いや、いじり……遊んでいじり倒したい気持ちだったが、ヒフミとアズサが待っていることもあるので、今回はその話題転換に素直に従うことにした。

「実は今日はハスミさんに、折り入って相談がありまして……」

「相談ですか？　私たちの手を借りたいような、大きな問題でもありましたか？」
「いえ、個人的な相談です。個人的に……ふふっ。そう、私個人からハスミさんに、二人だけの秘密の相談があるんです」
「はあ……まあ、話を聞くことは構いませんが……」
「ありがとうございます」
カツカツと床に音を立てながら、ハナコはハスミに一歩ずつ歩み寄る。
もしもここにいたのがアズサであれば、ある程度近づいたところで不意打ちで一気に距離を詰め、素早くハスミに関節を決めるくらいのことはしていただろう。
無論ハスミも正義実現委員の副委員長を担っているくらいなので、そう簡単に倒すことはできないだろうが……それ込みでも、先制の利を得ることができればほぼ確実に制圧できると判断したはずである。
しかしここにいるのはハナコだ。ハナコは不審者であり変質者でもあるが、アズサほど物騒な思考はしていない。
先制攻撃を仕掛けることなどはせず、ハスミに勧められたソファーの席に素直に腰を下ろした。
「それで相談とはなんでしょうか？　補習授業部の部員ではなく私にということは、なにか込み入った事情がありそうですが」
子猫を撫でながらではこういった話は不適切なので、ハスミは子猫を自分の横に座らせる。
ソファーのフカフカな気持ちよさもあってか、子猫は少し眠たげにあくびをしていた。
「複雑な事情……そうですね。ハスミさんは私と同じくらい大きいですから、そういう意味ではハスミさんにしか相談できないことだと思います」
「お、大きいですか？　えぇと……翼の話、ではありませんよね……」
キヴォトスには翼が生えている生徒が結構な割合で存在しており、ハスミの黒い翼は他の生徒たちと比べても一回り大きいので、かなり目立つ。

けれどハナコは翼が生えているタイプではないため、これでは『同じくらい大きい』の表現が当てはまらない。
ハスミとハナコ。一目でわかるくらい二人が共通して抱えている大きなものと言うと、一つしかない。
ハスミはチラリと、ハナコの制服を窮屈そうに押し上げているものを見た。
その視線に気づいたハナコはくすりと笑みをこぼす。
「はい、翼の話ではありませんね。ハスミさんのご想像通りのものについてのご相談です」
「……それはまあ確かに、私にしか相談できないことかもしれませんね……」
ヒフミやアズサ、そしてコハル。
ハナコが所属する補習授業部の他の面々は皆、そこまで胸が大きくはない。
三人の姿を思い浮かべたハスミは、デリケートな話題に少し気まずそうにしながらも納得を示す。
「ではつまり、ダイエットの相談ということでしょうか？　それでしたらその、おそらく私はあまり力にはなれないかと思いますが……」
ハスミは甘いものが好きである。否、大好きである。
ダイエットのために控えていたこともあったが、その時はストレスで感情や調子をやや崩してしまったこともあり、今はできる限り気にしていないようにしている……つもりだ。
そんな自分にダイエットの相談は不適切だろうという思いからのハスミの発言だったが、ハナコはふるふると首を横に振った。
「いえ、ダイエットの相談ではありませんね」
「違うのですか？　では、いったいどのような……」
「私、ずっと思っていたんです。こんなに大きいものを持っているのに、制服を着てるのって……とても窮屈じゃありませんか？」
いきなりなにを言い出してるんでしょうかと思いつつ、一応はハスミも同意を示すように頷く。
「まあ、そうですね。気持ちはわかります。ですが、制服の着用は校則

で義務付けられています。窮屈だからと言って私服での登校は許可されませんよ」
「わかっています。ですからハスミさんに一つお願いを……いえ、お誘いをしたくてここに来たんです」
「お誘いですか？」
「はい」
　ハナコは胸の前に手を当てながら、当たり前のように言い放った。
「これから校庭で服を脱ぎますので、ハスミさんもご一緒にいかがですか？」
「……はい？」
「これから校庭で服を脱ぎますので、ハスミさんもご一緒にいかがですか？」
「いえ……聞こえなかったわけではなくて……」
「なるほど。では、どうしてハスミさんにお誘いをということですね」
　絶対そういうことではなかったが、ハナコの中ではそういうことらしかった。
「正義実現委員会はトリニティにおける実質的な風紀委員ですから……その副委員長であるハスミさんに率先してそういったことをしていただければ、校則にも影響があるのではと思うんです。もしかしたら水着でも……あわよくば裸で登校しても大丈夫ということになるかもしれません。もしそうなったら、とっても素敵だと思いませんか？」
　……そういえばこの人こういう方でした、とハスミは頭痛を抑えるように額に手を当てた。
　そんなハスミの様子をどう捉えたのか、ハナコはいつも通りのお淑やかな（ように見える）微笑を浮かべる。
「ふふっ……どうやら悩んでいらっしゃるみたいですね。わかりました。こういう大胆な行為に臨むからには、一人で考える時間も必要なことでしょうし……ここで無理強いするのもなんですから、私は先に行って脱いでいますね」
　そう言ってハナコは席を立ってソファーの横に移動すると、見た目

だけはお嬢様らしいお辞儀を披露した。
ハスミも常であればきちんとお辞儀を返すところであったが、今回ばかりはそれをせず、ただただ大きくため息をつく。
……正義実現委員会とは、正義を体現する組織である。
そして今、その副委員長であるハスミの目の前には、校則を破ることを堂々と宣言している生徒がいる。
であればやるべきことは当然……。
「ハスミさんもどうぞ気が向いたらいらっしゃってください。ハスミさんならいつでも歓迎しますから」
「……」
「それでは失礼しますね。私はいつまでも待っていますので……また後ほどお会いしましょう」
「……」
相談とか言いながら、なんか一人で言うだけ言って立ち去ろうとしているハナコの背中を眺め、ハスミは無言でソファーに立てかけていた自身の銃に手を伸ばしたのだった……。

子猫救出大作戦（５／７）

『捕まってしまいました♡』

教室の方から銃声が一発だけ響いた後、しばらくしてそんなメッセージがハナコから送られてきて、ヒフミは思わず目眩がして倒れそうになってしまった。

間一髪でアズサが支えてくれたおかげで大事には至らなかったが……だいぶ精神的な疲労が溜まってしまっている。

それもまあ無理もない。問題を起こさずに事態を解決するというヒフミの目論見は、もはや叶わなくなってしまったも同然なのである。

銃声が聞こえてきた辺りから失敗の予想はついていたものの、こうして実際に突きつけられるのとでは絶望感が違った。

『なんとか服を脱ぐまではできたのですが……さすがは正義実現委員会。すぐに組み伏せられて、また着させられてしまいました……』

なんで応戦するでもなく脱いでるのかまるで意味がわからなかったが、たぶんわかる必要もないだろう……。

『牢屋に閉じ込める手際も一級品で……ふふっ。一人で薄暗い牢屋に閉じ込められて……悪い看守さんにイケない尋問でもされてしまいそうな雰囲気です♡』

捕まってしまったというのに、ハナコのテンションはいつもと変わらない。

まあいつも捕まってるからかもしれないが……。

端末が没収されていなかったのは不幸中の幸いと言えよう。こうして連絡を取り合うことができる。

『その……銃声がしましたが、怪我とかは大丈夫ですか？』

目眩も収まってきたところで、ヒフミも文字を打ち込んで返信する。

『ご心配ありがとうございます。大丈夫ですよ。私の隙を作るための、威嚇射撃みたいなものでしたから』

『そうですか……それならよかったです』

『ふふっ、ヒフミちゃんはあいかわらずですね。力及ばず囮としての役目は果たせませんでしたが、いくつか情報を得ることはできましたので、それについてお伝えいたしますね』
そうしてハナコから送られてきたメッセージを確認する。
内容は、正義実現委員会の教室内部の情報だった。
今、中にいるのは副委員長のハスミ一人だけであること。子猫はハスミの近くにいること。
そして牢屋の格子の隙間から見える、ハスミと子猫の具体的な位置についても。
「うん、これは良い情報だ。次の作戦を組み立てやすくなる。私たちの存在や作戦も悟られてはいないみたいだし……転んでもただでは起きないとはこのことかな」
囮としては失敗だったかもしれないが、斥候としての役割はじゅうぶん果たしたと言える。
ヒフミの横からちょこんと顔を出してヒフミの端末を覗いたアズサは満足そうに頷くと、次なる手を考え始めた。
「ア、アズサちゃん。まだなにかやるんですか……？　ハナコちゃんも捕まってしまいましたし、もう素直に全部話しちゃった方がいいんじゃ……」
「ヒフミの言いたいことはわかる。ヒフミは優しいから、これ以上誰にも傷ついてほしくないんでしょ？」
「そ、そういうわけでは……アズサちゃんに傷ついてほしくないのはそうなのですが……」
「ヒフミのその気持ちは嬉しい。でも望みを叶えるには、立ちはだかるものに抗うことは時に必要不可欠。子猫とハナコを救出する目標を達成するためには、正義実現委員会との衝突はもはや避けられるものじゃない」
わかってはいたことだが、やはり聞く耳は持ってもらえなかった。
……というかよくよく考えたら、自分が最初に囮として行って、素直に事情を説明すればよかったんじゃ……？
今更ながらそんなことを思いついたヒフミだったが……本当に今

更である。ハナコが捕まってしまった今、時既に遅しであった。
「教室の中には副委員長が一人……こちらは二人……人数的にはこちらが有利。でも、副委員長の近くに子猫がいるから、下手に銃は使えない……」
情報を整理するようにブツブツと呟く最中、アズサはヒフミの背中に視線を向ける。
アズサの視線の先には、なにも考えていなさそうな鶏のキャラクターことペロロを象った、ヒフミのお気に入りのバック、ペロロ様バッグがあった。
「ヒフミ。ちょっと武装の確認をしたい。その鞄の中、見せてもらってもいい？」
「あ、は、はい。どうぞ」
鞄を床に下ろすと、アズサはその中から一つ一つを取り出して確認していく。
絆創膏、クッション、折りたたみ傘など。実に多彩なものでギュウギュウに埋め尽くされたバックの中には、アズサが期待する武装の類も含まれていた。
「これは……発煙弾？　ずいぶん変わった形だけど……」
「あ、それはペロロ様型発煙手榴弾ですね。このペロロ様の口の部分から煙を出すんですよ！」
「……なんだか吐いてるみたいだね」
「あ、あはは……」
キヴォトスでは銃撃戦なんて日常茶飯事だ。これは、ヒフミがそういった厄介事から逃れるために備えていた武装の一つだった。
煙幕で相手の視界を遮ることができれば、逃げるのも容易になる。
あとは単純に最近発売された大好きなペロロ様関連のグッズだから持っていただけである。
「……？　これは……」
「あ、そ、それは……」
アズサが手に取ったのは、5、という数字がマジックでデカデカと書かれた、二つの穴が空いている紙袋だ。

これは以前、なぜか流れで銀行強盗することになった（!?）時に顔を隠すためにヒフミが使ったものだった。
数字は、頭にかぶった時にちょうど額になる部分に書かれている。
「……よし。良い作戦を思いついたよ、ヒフミ」
「い、良い作戦ですか？」
アズサが自分からこうしてなにかを自信満々に提案する時は大抵問題を起こす時である……。
なにか既視感を覚えながら、ヒフミはアズサと一緒に鞄の中にいらないものを戻して片付ける。
残ったのは、ペロロ様型発煙手榴弾と、数字が書かれた紙袋だ。
「それで、良い作戦というのは……」
「囮作戦。その趣旨は変えない。これが一番救出対象の安全を確保できるから。だけど、今度はもっと攻撃的に注意を惹きつける」
「こ、攻撃的に……？」
さきほどハナコが失敗したのは、言葉巧みに誘導しようとしたせいだとアズサは推測していた。
そのハナコの意図を察せられたことで、ろくに抵抗もできず捕まってしまったのだと。
実際は全然巧みでもなんでもなく捕まって当然も当然だったのだが、とにかく、初めから応戦する気概を見せなかったのがダメだったのだ。
戦う、襲う、攻撃する。そう言った意識を先に見せることで、相手の注意を惹きつける。
「作戦はこう。まず扉の前まで移動して、顔を隠す。扉を開けたらすぐに発煙弾を投げ込んで、煙が広まったら発砲する」
「は、発砲するんですか……？　ね、猫さんは……」
「わかってる。銃は子猫に当たらないよう、天井に向かって撃つ。だから、私たちは誰にも当たらないことは知ってる。けど、煙で見えなくなるあちらはそうじゃない」
そうなるとおそらくハスミは室内での銃撃戦を避けるため、猫の安全を確保した後、白兵戦を仕掛けるか、無理にでも戦う場所を移動さ

せようとしてくるだろう。
　そのために、まずは敵の位置を捉えるために煙の中に突っ込んでくるはずだ。
「そこで私は敢えて見つかる。ヒフミはその逆に煙の中に潜んで、気づかれないように教室の中に侵入してほしい」
「わ、私がですかっ？」
「あちらが私に気づいたら、私は弾幕で牽制しながら後退してその場を離れる。副委員長も追ってくるはずだから、ヒフミはその間に子猫とハナコを救出して」
　アズサのその作戦は確かに合理的で、確実だった。
　こちらは二人で、敵は一人だけなのだから、一人が惹きつけて、もう一人が侵入すればいい。
　だが、こちらから攻撃的なアクションを起こしてしまえば、処罰はきっと相当なものになる……。
　特に、実際に発砲したアズサはそれを免れることはないだろう。
　けれど……二人とも顔を隠したまま逃げ切ることができれば、処罰から逃れることもできるかもしれない。
「で、でもその、私たちは二人で、紙袋は一つしかありませんが……だ、大丈夫でしょうか？」
「大丈夫。私にはこれがある」
　と言って、アズサがどこからともなく取り出したのは、なんとガスマスクだ。
　そういえばヒフミが初めてアズサと会った時にも、アズサはこれをつけていた。
「これがあれば煙の中でも自由に動ける。あ、ヒフミは煙を吸い込んじゃうとまずいから、潜んでる間は息を止めててほしい」
「う、うぅ……わかりたくありませんが……わかりました……」
　襲撃は止められない。いくら説得してもダメだった。
　大した問題を起こさず、事態を終わらせることもできない。ハナコが失敗した時点で道は潰えた。
　であれば、もう……問題を起こした上で、それが自分たちの仕業で

はないということにするしかない……！
そんなヤケクソ的な思考で、ヒフミはついに自ら襲撃を仕掛けることに賛同した。
「……よし。行こう、ヒフミ」
できるだけ足音を立てず、二人で慎重に教室の前に移動する。
教室の周りや、扉の近くから見える場所には、他の生徒は誰もいない。
それを確認した二人は互いにアイコンタクトを取り、ヒフミは紙袋を、アズサはガスマスクをかぶった。
音を立てず、ヒフミは扉の取っ手に手をかける。
するとアズサが指で、カウントダウンを始めた。
指が三本のところから、二本、一本……〇本。
――ガチャッ、カンッ、シュウウウウウウウウッ……！
「な、何事ですか!?」
歯でピンを外し、発煙手榴弾を教室の中に投げ込んだアズサは、ある程度煙が充満したタイミングを見計らって天井に向かって発砲する。
――ダダダダダダッ！
「っ!? 襲撃!? こんな時に、いったい誰が……いえ！ とにかく、この子だけは守らなければ……！」
アズサの『Ｇｏ』というハンドサインに従い、ヒフミは大きく息を吸い込んで、煙の中に身を投げた。
扉を越えてすぐに教室の隅の方に移動し、存在がバレないように気配を消す。
煙の向こう側ではしばらくバタバタと、ハスミの慌てたような足音が聞こえていた。
その間、たびたびアズサは何度か銃を空撃ちして、こっちに来いとでも言うように敢えて位置を知らせることで、ハスミの危機感を煽るとともにヒフミへの注意をそらしていた。
やがて子猫の避難が完了したのか、ハスミの足は教室の外へ、つまりはアズサの方へ向かうのがわかった。

「何者ですか！　ここまで堂々と教室に襲撃をしてくるからには、覚悟はできているのでしょうね……！」
猫に当たっていたかもしれなかったこともあってか、怒り心頭と言った様子だ。
実際は猫には絶対に当たらないよう配慮していたのだが、そんなことはハスミが知る由もない。
ヒフミはそろそろ息が辛くなってきていたが、まだハスミは近くにいるし、あいかわらず煙も充満している。
今呼吸をしたら十中八九咳をしてしまってバレてしまうので、とにかく息を殺し続けた。
「私の名はペンギン。正義実現委員会……今日がお前たちの命日だ」
「は……？　ペンギン？　……え、なにをやっているのですか？　アズサさん」
「アズサじゃない。ペンギンだ」
あれ⁉　思いっ切りバレてませんか⁉
そう思ったヒフミだったが、声を出すことだけはなんとか我慢した。ここで声を上げたら、本当に全部台無しになってしまう。
あくまで白を切るアズサに業を煮やしたのか、ハスミが銃を構える気配がした。
「どんな事情であれ、ここまでのことをしでかしたからには見過ごすわけにはいきません。アズサさん、あなたを拘束させていただきます」
「ペンギンだ。それに、拘束だって？　ふんっ。捕まえられるなら捕まえてみるといい」
「っ、逃げるのですか⁉　待ちなさい！」
作戦通り、アズサが弾幕をばら撒きながら廊下を走り去っていく。
ハスミもそれに応戦しながら、アズサを追って教室を去っていった。
「……っ！　けほっ、けほけほっ！」
そろそろ息が限界だったので、煙の外に出ようと教室の奥の方へと走ったのだが、煙から出るより先に息を吸ってしまった。

煙で咳き込みながらなんとか煙の中を脱出し、すぐに窓を開ける。
「はぁ、はぁ……こ、これで、猫さんを連れ出すことができます……」
キョロキョロと辺りを見渡しながら教室を歩いてみると、ソファーの後ろに隠れている子猫を発見した。
銃声が怖かったのか、角で縮こまりながらプルプルと震えている。
「だ、大丈夫ですよ……もう怖いことはありませんから。安心してください……」
これ以上怯えさせないようにゆっくりと近づいて、優しく抱きかかえる。
子猫は不安そうにヒフミを見上げていたが、ヒフミがよしよしと頭を撫でてあげると、身を預けるようにくっついてきた。
「……えへへ、人懐っこい良い子ですね。あとは、ハナコちゃんを解放すれば……」
見たところハナコは、正義実現委員会の教室に備えつけられた牢屋に囚われているようだ。
机の上に運良く牢屋の鍵が置いてあるのを見つけると、ヒフミはそれを取って、牢屋の方に向かった。
「ハナコちゃん！　無事ですか？」
「はい、無事ですよ。助けに来ていただいてありがとうございます。それにしても……ふふっ。本当に正義実現委員会を襲撃しちゃいましたね～」
「あ、あぅ……はい……でも、やっちゃったものはもう仕方ありません……」
牢屋の鍵を解錠し、ガチャンと扉を開く。
「そうですね。ヤッちゃいましたからね……ヤッてしまったものは仕方ありませんよね。ふふふっ」
「あはは……」
こんな時でも平常運転なハナコに若干苦笑しつつ、ヒフミはハナコを牢屋の中から連れ出した。
それから、早くこの場を立ち去るためにも教室の出入り口に戻ろうとしたのだが……。

「ところでヒフミちゃん、その紙袋は確か覆面水着団の……あら？」
「あ、足音……？　だ、誰かこちらに来ます！　ハナコちゃん、牢屋に戻ってください！」
煙の向こう側から誰かが走ってくるような音が聞こえてきて、ヒフミはハナコの背中を押してダッシュで牢屋の方に戻った。
「……っ！」
ハナコを牢屋に入れて、ヒフミは少し迷ってから、自分も牢屋の中に入る。
こんな騒ぎがあった教室の中、一人だけ牢屋の外にいるのは怪しすぎると判断したためだ。
しかしその後、ヒフミはすぐに自分の失策に気がつく。
「あっ。ね、猫さんまで連れてきてしまいました……ど、どうすれば……」
牢屋の中に猫がいるのは明らかに不自然だった。
いくらなんでも、牢屋の中に小動物を閉じ込めるなんて虐待もいいところだ。そんなことを正義の名を冠する委員会がするはずがない。
もしも牢屋の中に猫がいることがバレてしまえば、ヒフミたちが意図的に牢屋の中に入っていることまで連鎖的にバレてしまうだろう。
だが、今更牢屋の外に出て猫を解放しているような時間はなかった。
足音はすでに、すぐそこにまで迫っていた。
キョロキョロと辺りを見回してみたが、牢屋の中に猫を隠せそうな場所など存在しない。
ヒフミは一瞬の逡巡の後、ハナコに密着すると一緒に床に座り込んで、その背後に子猫を隠すことにした。
「ハスミ先輩!?　けほっ、け、煙が……な、なにがあったんですか!?」
正義実現委員会の教室から煙が出ているのが見えて、急いで来ただろう女子生徒の声が聞こえた。
ハスミに呼びかけているようだったが、ハスミは目下アズサを追跡中のため、残念ながらここにはいない。
誰かいないのかと、未だ煙が舞う教室の中を彷徨っていた女子生徒

は、ヒフミとハナコの存在に気がついたようだ。
その足が牢屋の方に向かってくるのを見て、ヒフミはゴクリと生唾を飲み込んでいた。

子猫救出大作戦（6／7）

「あなたたちは……ハナコさんとヒフミさん……？」
女子生徒の名前は、静山（しずやま）マシロ。
本来のトリニティの白い制服と反するかのようなその黒い制服は、正義実現委員会の一員である証だ。
近づいてきたマシロに、ヒフミは緊張で汗ばんだ手を握りながら笑いかける。
「こ、こんにちは……」
「あ、はい。こんにちは。ええと……これはどういう状況なんでしょうか？」
ヒフミが窓を開けておいたおかげで今はそれなりに換気されているが、煙が未だ残る誰もいない教室。
ヒフミとハナコが囚われている牢屋。
突然それらの情報を叩きつけられたマシロは、まだ状況を把握しきれていなかった。
「ついさきほど、ペンギンと名乗る方が正義実現委員会を襲撃してきたんです」
今回の騒ぎはさも自分は関係ないとばかりに、ハナコが一応は事実である出来事を語り始めた。
嘘をつく時は真実を交えれば信憑性が増すとも言うが、嘘などつかずとも、真実を一部伏せるだけでもじゅうぶん効果はある。
「ハスミさんは、逃げたその方を追ってどこかへ行ってしまわれましたね。なので今は私たちしかいません」
「ペ、ペンギンですか。変わった名前の生徒もいらっしゃるのですね……」
そうじゃないのですが……。
あまりに素直すぎるマシロの反応に口を挟みたくなったヒフミだったけれど、そうじゃないとは？　と聞き返されたら困るので、おとなしくお口にチャックをした。
実直かつ素直な性格であるマシロはハナコの言ったことをすっか

り信じ込んでしまって、納得したように頷いている。
「教室の惨状についてはわかりました。では、お二人はどうして牢屋に？　ハナコさんはまあ、想像がつきますけど……」
ヒフミはアズサやハナコと違って、あまり問題は起こさない方だ。
マシロが疑問に思うのも自然な流れだった。
「いや、というかさっきから気になっていたのですが……ヒフミさんはなぜ紙袋を頭に？　なにか深い意味があるのでしょうか？」
「え。あっ」
ハナコが当たり前のようにヒフミと見破って対応してきたためにヒフミ本人もすっかり忘れてしまっていたが、そういえば正体を隠すために紙袋をかぶっていた。
そう。正体を隠すために、かぶっていた……はずなのだが。
「あ、あの……なぜこれをかぶっているのに私がヒフミだってわかって……」
「え。いえ……わかりますよね？　ヘイローもそうですが、銃だってヒフミさんと同じものですし……あと、その特徴的なバックを見れば誰だってわかると思います」
「あぅ……い、言われてみれば……」
顔を隠したくらいでは意味がない。数々の指摘を受けて、ようやくヒフミはそのことを自覚する。
アズサはヒフミと違ってこんなバックは背負っていないが、過去、あのガスマスクをつけた状態で正義実現委員会と交戦したことがあった。
つまるところ、二人とも初めから正体バレバレだったのだ。
「それでヒフミさんは、なぜ牢屋の中でそんな格好を……」
「そ、それは……」
「ヒフミさんはこの紙袋をかぶったまま敷地内を徘徊して、頑なに外そうとしなかったので捕まってしまったんですよ」
「ハ、ハナコちゃん!?　きゅ、急になにを……!?」
とんでもない言いがかりだった。
ヒフミは思わず抗議するように声を荒げてしまうが、ハナコはなぜ

か「ふふっ」と誇らしげに胸を張っている。
こころなしか『うまく誤魔化してあげましたよ』と主張しているかのようだ。全然うまくないが。
「……そういうことでしたか。私はてっきりヒフミさんは、もう少しまともな方だと思っていたのですが……残念です」
「あ、あうぅ……」
ヒフミの名誉がどんどん傷ついていく……。
しかしその犠牲の甲斐あってか、誤魔化すことに成功したようだった。
これで誤魔化せてしまえるのもどうかと思うが……紙袋をかぶっただけで正体を隠せると思い込んでいたヒフミに言えることではなかった。
「わかりました。つまりお二人は、この教室の惨状とは関係ないということですね……でしたら、私は先輩の支援に向かいたいと思います。お二人は、そのまま牢屋の中で待機していてください。あとでもう一度ハスミ先輩に確認して、処遇を決めさせていただきます」
「は、はい。わかりました……」
自身の銃である巨大な対物ライフルを軽く背負い直しながら、マシロは踵を返す。
なんとかやり過ごすことができた安心感から、ヒフミは密かにほっと息を漏らした。
それからさきほどのやり取りのこともあり、ヒフミはそっと紙袋を外して、バックの中にしまい直す。
紙袋をかぶっただけで正体がバレないなどと思い込んでいた過去の浅はかな自分とは、これでおさらばである……。
「では、また後ほ――」
にゃー……。
このまま立ち去ってくれればよかったのだが、不意にそんな鳴き声が鳴り響いたことで、立ち去る寸前だったマシロの足が止まった。
（ね、猫ちゃん……!?）
その声の主は、ヒフミとハナコの後ろに隠れていた子猫だった。

薄暗く冷たい空間にいることに不安を覚えているのか、覇気のないずいぶんと小さな鳴き声だったが……マシロの足が止まったということは、あちらまで聞こえてしまっていたということだ。
マシロは立ち止まった状態で、キョロキョロと辺りを見回し始める。
「……今の鳴き声は……猫？　いったいどこから……気のせいか、牢屋の方から聞こえたような……」
正確な位置まではわかっていないようだが、明らかに訝しんでいる。
ヒフミはサーッと顔を青くした。
このままでは、猫が牢屋の中にいることがバレてしまう。
いくらマシロが素直な性格だと言っても限度がある。ここに猫がいることがバレてしまえば、言い逃れはできない。
ふと背後を見れば、子猫は縋るようにヒフミの制服に前足をかけ、ヒフミを見上げていた。
その仕草からは子猫が感じる不安がひしひしと伝わってきて、次にまたいつ鳴いたところでおかしくない状況だと理解するにはじゅうぶんだった。
もう、考える時間はない。
ヒフミは焦る思考のまま、不安そうに鳴き声を発しようとする子猫に合わせて、半ば反射で口を開いた。
「っ――に、にゃー……」
「……？　……え、っと……」
「……っ、にゃ、にゃぁ……にゃぁー……！」
「……ヒ、ヒフミさん……？」
猫が鳴こうとするたび、その鳴き声をかき消すように、ヒフミは猫の鳴き真似をした。
あまりの羞恥心に顔がタコのように真っ赤になってしまっていたが、背に腹は代えられない。
ヒフミは目をギュッと瞑りながら、とにかくマシロに本物の猫の鳴き声が届かないことだけを祈って、何度も猫の鳴き真似をし続ける。

マシロは目を点にしてヒフミを見つめ、いつも余裕を保っている印象があるハナコも珍しく驚いていた。
そんな二人の反応は瞼を閉じたヒフミには見えていなかったが、奇異の視線で見られてしまっている感覚は嫌でも伝わってくる。
穴があったら入りたい気持ちでいっぱいだったが、それでもヒフミは愚直に猫の鳴き真似をし続けた。
「にゃー……にゃぁ、にゃぁぁっ……」
「……な、なるほど？」
猫になり切ったヒフミをしばし眺め、マシロは納得したような納得していないような、よくわからない感じに首を傾げた。
「えぇと……さきほどのはヒフミさんの鳴き声だったんですね。正直、どのような意図があって突然そのようなことをしたのか私にはさっぱりなのですが……牢屋に猫を入れるなんて非人道的なこと、正義実現委員会の人がするはずないですしね。事実は小説より奇なり……ということなのでしょう」
「あ、あうぅ……」
なんでこんなので騙されてしまうのか。あんまりにも素直すぎないか。
そう思ったヒフミだったが、これだけ恥ずかしい思いをした苦労がせっかく報われたのだ。余計な口出しはしないように努めた。
「あ、電話が……失礼します」
ブー、ブー、とマナーモード特有のバイブ音がかすかに響いたかと思うと、マシロが自身の端末を取り出して、それを耳元に当てた。
『マシロ！　今、手は空いていますかっ？』
電話口から叫ぶようにして聞こえてきた声は、ハスミのものだった。
時折銃声も混じっていることから、交戦しながらかけてきたようだ。
「はい。いつでも行けます。どこに向かえばいいですか？」
『第11校舎へ！　現在、そこから北の位置でアズサさんと交戦しています！　支援を！』

「了解しました。すぐに第11校舎へ向かいます。狙撃ポイントに到着次第、先輩の端末にワンコールだけ通話をかけます」
『お願いします！』
トン、と画面をタッチして通話を切ると、マシロは今度こそヒフミとハナコに背を向けた。
「では、申しわけありませんが私は仕事がありますので、また後ほど」
対物ライフルを背負っているとは思えない身軽さで、マシロは急いで教室を後にする。
その足音が聞こえなくなった頃を見計らい、残された二人と一匹も牢屋を出た。
「な、なんとか誤魔化せましたね……これで逃げることができそうです。行きましょう、ハナコちゃん」
「にゃー♪」
「……」
湯気が出そうなくらい顔が熱いのを自覚しながら、ヒフミは子猫を抱えて出入り口へ向かった。
ハナコも上機嫌にニャーニャー鳴きながらその後をついてくる。
この頃になるとほとんど換気されきっていて、煙はほとんど残っていなかった。
「とりあえず、子猫を飼い主の子に届けましょう。その後は……アズサちゃんのことを、どうにかしないと……」
正体が割れ、真正面から正義実現委員会とやり合っているアズサはもう、なにをどうやったって言い逃れはできないだろう……。
だけどアズサはヒフミの大切な友達だ。見捨てることなんてできない。
「あれ……？　……なにやってるのよ、あんたたち」
「え……コ、コハルちゃん？　ど、どうしてこんなところに……」
マシロとの遭遇をやり過ごせたことで、油断していたのだろう。
ちょうど教室を出たところで、廊下を歩いていた小柄な少女に見つかってしまった。
ピンクの髪とツインテール。そして正義実現委員会所属の者と同

じ黒い制服を着ていることが特徴のその少女とヒフミは、知り合いだった。
彼女の名前は下江コハル。
正義実現委員会と同じ制服を着ていることからわかる通り、元々は正義実現委員会の所属だったのだが……今の彼女は正義実現委員会ではなく、ヒフミと同じ補習授業部の部員だ。
「こんなところって、ここは正義実現委員会の由緒正しき教室よ？　私は正義実現委員会の一員なんだから、ここにいたって不思議じゃないでしょ」
「あら？　コハルちゃんは、補習授業部にいる間は正義実現委員会として活動できないんじゃありませんでしたか？」
「う、うるさいっ！　心は今も正義実現委員会なの！　べ、別にその、子猫のことについてハスミ先輩に相談しにきたとか、そ、そういうわけじゃないから！」
そういうわけらしかった。
聞いてもいないのに事情を全部説明してくれたコハルを眺め、ヒフミは苦笑する。
「そ、それより、あんたたちは正義実現委員会の教室でなにをしてたのよ。っていうか、なんか妙に煙臭いような……」
「あ、あぅ……そ、それは……」
「……？　その子、さっきヒフミがモモトークで言ってた子猫よね？　ふーん……見つかったんだ」
一見するとまるで関心がなさそうな感じだが、よく見るとコハルの頬は安心したように緩んでいる。
素直に心配していたと言えない微妙なお年頃だった。
「あ、は、はい。見つかったというか、なんというか……」
「……？　なによ。はっきり言いなさいよ」
ヒフミの言葉を濁すような態度にコハルが容赦なく詰め寄ると、代わりにハナコがいたずらを自慢するようにお茶目に笑った。
「正義実現委員会を襲撃して、誘拐したんです♪」
「……は？　正義実現委員会を……襲撃？」

「ハ、ハナコちゃんっ……！」
コハルは元正義実現委員会で、事あるごとに正義実現委員会に復帰したいと公言している。
そんな彼女に正義実現委員会を襲撃したなどと告げれば、どうなるかなど目に見えていた。
「……はぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?!?!?　しゅ、襲撃!?　正義実現委員会をっ!?　な、なにやってるのよあんたたちっ!!」
凄まじい大声が廊下に響き渡る。
子猫が驚いてビクッと一瞬飛び上がり、縮こまってヒフミの制服に顔を埋めていた。
チワワが大激怒しているかのようなコハルの様子に、ヒフミはあわあわと必死に対応する。
「ち、違うんですコハルちゃん……！　そ、その、これには深いわけがありまして……」
「ふ、深いわけってなによ！　こ、ここはトリニティの平和を守る正義実現委員会よ!?　そこを襲撃する正当な理由なんて、トリニティの生徒である以上あるわけないじゃない！」
「あ、あぅ……こ、子猫がハスミさんに拾われたと聞いて……で、でも、素直に事情を話しても、きっと相応の対価を要求されるだろうからって、アズサちゃんが……」
「対価っ!?　そんなもの要求されるわけないでしょ！　正義実現委員会よ!?　正義を実現するための組織よっ!?　むしろ先輩たちなら、猫の安全のために頑張ってくれたからって、いつもの問題行動に目を瞑って感謝するくらいはするわよ！」
「あ、あぅ……」
紛れもない正論だった。正義実現委員会とは元よりそういう委員会である。
アズサの認識が偏りすぎていることには薄々気がついていたが……アズサがあまりに純粋すぎて、どうしても強く言うことができないヒフミのミスだった。
「まあまあ、そう怒らないであげてくださいコハルちゃん。ヒフミ

ちゃんは私やアズサちゃんとは違って、襲撃には反対だったんですよ」
助け舟を出してくれたのはハナコだ。
ここまでずっとからかわれ続けてきていただけに、ヒフミは思わず目を瞬かせてハナコの方に振り返った。
なだめるようなハナコの口調にコハルは言葉を詰まらせつつ、不機嫌そうにサッと視線をそらして、唇を尖らせる。
「……で、でも、結局は襲撃したんでしょ。だ、だったら同罪よ、同罪……い、いや、それ以前に賛成だったっていうあんたに反論されたくないんだけど！」
「同罪……そうですね。元より私たち補習授業部は一蓮托生の身……試験で個人がいくら良い成績を取っても、一人がダメなら全員落第になりかねない、そういう集まりですからね。ですから、これは補習授業部全員の罪と言えるでしょう」
「いやあんたたち三人の罪でしょ!?　私を勝手に巻き込まないでくれる!?」
本当に正論である。こんな見に覚えのない大事件の罪を突然かぶせられてもマジで困る。
「て、ていうかアズサはどこ行ってるのよ。姿が見えないけど……」
「アズサちゃんなら、今は第１１校舎の近くで正義実現委員会と交戦してるらしいですよ」
「はぁぁぁぁぁ!?　こ、交戦!?　襲撃って、ま、まさか真正面からやり合ってるの!?　正義実現委員会とっ!?　バカなの!?　い、いや、バカだったわね！　なんたって補習授業部だもん！　バカ以外の何者でもなかったわね！　バーカバーカ！」
その発言は完全にブーメランでもあるわけだが、気づいているのだろうか……。
「コ、コハルちゃん、ちょっと落ちついて……」
「フゥ、フゥー……！　……うぅぅ……！　な、なんでこんなことに……」
「ふふっ……アズサちゃんが惹きつけている間にヒフミちゃんが侵入

して、先に捕まってしまった私と子猫を助ける……そういう作戦だったんですよね？　ヒフミちゃん」
「あ、は、はい。そ、そうですね。そういう作戦でした」
「作戦自体は成功してますし、さすがの手際ですね。牢屋の中でのヒフミさんの機転も、実に見事でしたし……」
「……牢屋の中？　なにそれ。なんの話よ」
「ハ、ハナコちゃんっ……そ、その話は……！」
　ヒフミは強引にハナコの口を塞いででも話が続くことを阻止しようとするが、その行動を察していたらしいハナコはするりとそれを回避する。
　そしてハナコはうっとりするように頬に手を当てながら、ほぅっ、と熱がこもった吐息を漏らした。
「ヒフミちゃん、猫みたいに可愛らしく喘いでらっしゃって……ふふっ。とても可愛らしかったです♡」
「え……あ、喘いだ……？　ね、猫みたいに……？」
「ハ、ハナコちゃんっ!?　そ、そんな誤解を招く言い方は……！」
「にゃんにゃんするヒフミさんは、それはもう愛らしくて……思わず私もにゃんにゃん鳴かされてしまいました♡」
「にゃ、にゃにゃ、にゃんにゃん……？　にゃんにゃんっ!?」
「あ、あぁ……ハナコちゃん……」
　間違ってはいない。まあ間違ってはいないのだが、言い方が相当アレである……。
　無論、ハナコのこれはわざとだった。
　なにを想像したのか、あるいはナニを想像したのか……。
　コハルは見る見る間に耳まで朱色に染め上げると、こちらもまた猫みたいな目になってヒフミを睨んだ。
「にゃにゃにゃっ……にゃ、にゃにっ、なにやってるのよあんたたちは！　ね、猫みたいに喘いだ!?　そ、それってそういうことよねっ!?　ハ、ハナコはともかく……ヒ、ヒフミのことは結構真面目なやつだと思ってたのに……！　も、もしかして真面目だからこそ？　だ、だって普段真面目な人ほど、そういう欲が強いって本で見たことが……

う、うぅ、じゃあやっぱり本当に……！」
「ち、違いますコハルちゃん！　ね、猫みたいにというのは間違ってませんが、あ、喘いだというのとは少し違くて……！」
「う、うぁぁっ！　ち、近寄らないで！　へ、変態！　変質者っ！　エロタイツ！」
　変態も変質者もヒフミのお隣のハナコの方が全然当てはまるのだが、多感なお年頃であるコハルに猫（意味深）の話は刺激が強すぎたようである。
「あ、あぅ……」
　見知った仲であるコハルから拒絶するように距離を取られてしまって、ヒフミはがっくりと項垂れる。
　何気にエロタイツとか言われてしまったことも地味にショックだった。ただタイツ履いてるだけなのに、なんでそこまで言われないといけないの……。
　そんなヒフミの様子にコハルは少々罪悪感が刺激されたようだったが、ブンブンと首を振って振り払うと、また睨むようにしてヒフミとハナコを見た。
「ふふっ。なにか、少し誤解させてしまったようですね」
　意図して誤解させた張本人が悪びれもせずなんか言っている。
　ただ、一応は誤解を解こうとしてくれているみたいだったので、ヒフミは口を挟まずに見守ることにした。
「私とヒフミちゃんはただ、一緒に牢屋の中にいただけですよ」
「牢屋に……み、密室に二人だけで……!?」
「……ふふっ。はい、そうです。出口が閉ざされた薄暗い部屋の中、素行の悪い女子生徒が二人……我慢できなくなってしまっても、おかしくないと思いませんか？」
「や、やっぱりそういうことじゃない！　この変態コンビ！」
　誤解を解こうとしていたのは勘違いだったらしい。
　いや、きっと最初は本当にちゃんと解いてあげようとしたのだろうが、きっとコハルの妄想じみた反応に触発されて……。
　まったくもって収拾がつかない。

ヒフミはまた目眩がして、ふらりと壁に寄りかかった。
（うぅ……助けてください、アズサちゃんー……）
きっと今も戦っているであろうアズサに助けを求めてしまうくらい、もういろいろとめちゃくちゃだった……。

子猫救出大作戦（７／７）

「ありがとうございます、ヒフミさん」
あれからなんとかコハルの誤解を解いて、ヒフミは子猫をクラスメイトの子に届けた。
心の底からの微笑みとともにお礼を述べ、お辞儀をし、去っていく後ろ姿を見送る。
子猫もようやく飼い主の元に戻ることができたことに喜ぶように、スリスリと飼い主に頬を寄せていた。
いろいろと大変だったけれど、クラスメイトの子や子猫のそんな姿を見られただけでも、苦労した甲斐があったとヒフミは思えた。
「それでは、あとはアズサちゃんを回収するだけですね」
「……そう、ですね」
いろいろと大変だった……と称したが、そうだ。
確かに子猫を飼い主に渡すことはできたが、まだ事態は終わっていない。
それも特大の問題が残っている。
ハナコの確認にヒフミは疲れ切った沈痛な面持ちで頷きながら、自分の端末を取り出した。
モモトークを開き、アズサとのトーク画面を開く。
「……ど、どうしましょうか」
「素直に投降しろって送りなさいよ」
「そんな内容を送っても、アズサちゃんは絶対に了承しません……」
コハルの意見は正論ではあったが、人は感情で動く生き物だ。ただの正論では動かない。
特に正義実現委員会に降伏するような内容であれば、アズサは絶対に受け入れないだろうことをヒフミは身をもって知っていた。
「うぅ……そ、そうです。どうにかアズサちゃんを助けて、一度姿をくらますのはどうしょうか……一日経てばアズサちゃんも正義実現委員の方々も落ちつくでしょうし、それから正直に事情を説明するのが良いと思うのですが……」

「日を空けてしまった方が、騒ぎを長引かせたということで罰則が重くなりませんか？」
「あ、あうぅ……そ、それもそうかもしれません……」
処罰をなくすということは、もはや不可能だ。
とにかく処罰を軽くするための方法を、ヒフミはハナコやコハルと模索する。
「あ、私たちが正義実現委員の皆に加勢するのはどう？　そうすればアズサを捕まえるのに協力したからって、あんたたちは罰則が軽くなるし、騒ぎも早く収まるわよ」
「そ、それはダメです！　そんなアズサちゃんを裏切るような真似なんてできません！」
「う、裏切るって……そ、そんな大したことじゃないでしょ……で、でも、そうね。い、一応は同じ補習授業部の、その……な、仲間だし……う、裏切るのはダメよね……」
名案！　とばかりに発案したコハルだったが、ヒフミの返しに少々動揺しながら気まずそうに自分でも却下する。
すると今度はハナコが声を上げた。
「では、その逆にアズサちゃんに加勢するのはどうでしょう？　もうこの際、正義実現委員会の人たちを丸ごと全員倒しちゃえば、丸く収まるんじゃないでしょうか？」
「そ、それこそ最悪な結果になるでしょ！　処罰だって軽くなるどころかもっとずっと重くなるわよ！」
「うーん……そうですか。ままならないものですね……」
罰則をもっとも軽くする方法は、やはりコハルの提案である正義実現委員会に加勢することだろう。
加勢してアズサの捕縛に協力した上でアズサの罰則を軽くすることを申し出れば、きっともっとも被害は小さくなる。
だけどヒフミ的に、それだけは絶対にやりたくなかった。
アズサは大切な友達だ。たとえ一時と言えど、信じてくれている彼女を裏切りたくない。
しかしだからと言って、ハナコが提案するアズサに加勢して正義実

現委員会と戦うという選択は悪手中の悪手だ。
　そんなものよく考えなくても最悪の結果しか生まない。被害も最大限に広がるだろう。
「……やっぱり、ハスミさんに素直に事情を説明しましょう。どうにかアズサちゃんへの攻撃も中止してもらうように懇願して、そうしたらアズサちゃんを説得して一緒に投降を……」
　そうして考えに考えて出した結論は、ヒフミが最初からずっと主張していた、素直に全部話すというものだった。
「アズサちゃんだって、真剣にお願いすれば言う通りにしてくれるはずです。正義実現委員会の方には、い、いっぱい怒られるでしょうけど……こうなった以上、もう仕方ありません。これ以上被害が広がる前に、双方を落ちつかせるべきです……」
「ヒフミちゃんらしい結論ですね。今日はじゅうぶん楽しませてもらいましたし、私はそれで構いませんよ」
「ふーん。まあまともな結論だし、いいんじゃない？　ま、一応応援しといてあげるわ。頑張ってね」
　完全に他人事なコハルの発言を聞いて、ハナコは首を傾げた。
「あら？　コハルちゃんも一緒に来るんですよ？」
「え。な、なんでよ。子猫のことはその、し、心配……い、いや、ちょっと気になったから見送りにきたけど、そもそも私、今回の騒ぎにはなにも関係ないでしょ」
「ふふっ……水臭いことを言わないでください。私たちは、同じ補習授業部の仲間……でしょう？　コハルちゃんも、さっきそう言ってたじゃないですか」
「は、はぁっ？　そ、それはその……い、言ったかもしれないけど……そ、それとこれとは話が別でしょ！　さっきも言ったけど私、あんたたちが起こした騒ぎになにも関わってないし！」
「でもコハルちゃん、補習授業部は皆同罪だって言ってたじゃないですか」
「あ、あんたたち三人が同罪だって言ったの！　わ、私は別よ、別！」
　これ以上厄介事に巻き込まる前にコハルが逃げ出そうとしていた

が、そうはさせまいとハナコが背後から羽交い締めにして拘束する。
　コハルの方が体が小さく、二年生であるハナコと違って一年生なので、経験も差もあっていとも容易く捕まってしまっていた。
「え、あっ、ひゃっ……!?　ちょ、どっ、どこ触ってるのよ!?」
「ふふふっ……私はコハルちゃんをおとなしくさせるのに手一杯なので、どこを触っているのかまではわかりませんね。どうぞコハルちゃんの口から直接、教えていただけませんか？」
「わ、私の口からっ……!?　う、うぁぁぁぁあっ！　きゅ、急になに言い出すのよ！　へ、変態！　淫乱ピンク！」
　コハルはジタバタ必死に暴れているが、ハナコは全然余裕そうだ。手一杯とか絶対嘘だった。
　あと確かにハナコの髪はピンクだが、微妙に色合いも違うがそれはコハルもである。これもまた特大のブーメランだ。
　そんな二人のいつも通りのやり取りに苦笑しつつ、ヒフミは銃声がかすかに聞こえてくる方向を見やった。
「あ、あはは……と、とにかく行きましょう！　急がないと、そろそろ暗くなっちゃいます！」
「そうですね。アズサちゃんを追っている正義実現委員の数も、もう相当なものになっているでしょうし……」
「うぅぅ……な、なんで私まで……」
　すでに夕暮れと呼ぶべき時間に差し掛かっている。
　普段より赤みが差した校庭や校舎を横切って、三人は銃声が聞こえる方向へと走った。
「……あ、あれ？　なんでこんな場所に、人がたくさん倒れて……」
　そろそろ銃声がする場所へたどりつくというところで、ヒフミたちは、黒い制服を着た生徒たちが道に横たわっている光景に遭遇する。
　その様はまさしく惨状だった。身体も制服もボロボロで、全員立ち上がれそうにない重傷である。
　このような傷つけ方は、銃弾では不可能だ。
　手榴弾などの爆発物を使ったにしても、数が多すぎる。それに、爆発の跡も残っていない。

これではまるで、装甲車か戦車にでも思いっ切り轢かれたかのようで……。
「……ま、まさか……」
とてつもなく嫌な予感がする……。
……すぐ隣の校舎の中から、なにか音が近づいてくる。
不穏な、校内をなにかが疾駆しているような聞き覚えのある騒音が……。
「こ、これはやっぱり……！　ハ、ハナコちゃん！　コハルちゃん！　ふ、伏せてください！」
「はい？　えっと……？」
「はぁ？　ヒフミ。あんた急になに言って――ひゃぁあぁっ!?」
ドカアアアアアンッ!!!!
突如、壁の奥からとてつもなく重量があるなにかが相当なスピードで衝突してきたように、近くの校舎の壁が爆発する。
その場に走った衝撃と、校舎の壁の瓦礫から逃れるように地面に伏せて、三人はなんとかその爆発をやり過ごした。
「な、なにっ!?　い、今のなに!?　なにが起こったの!?」
「せ、戦車です……！」
「はぁ？　せ、戦車……？」
校舎の壁が爆発した影響で土埃が舞っていたが、次第に晴れてくると、爆発を起こしたものの正体が見えてくる。
それはヒフミの言った通り、まさに戦車だった。
トリニティ仕様に若干改造が施された、クルセーダー巡航戦車。通称、クルセイダーちゃんである。
校舎の中から校舎の壁を破壊して飛び出してきたそれは、その勢いのまま地面に転がっていた生徒たちをさらに無惨に轢き飛ばして道を爆走していた。
しかし不意に停止したかと思うと、こちらに後退してくる。
ハナコやコハルは自分たちも轢かれるのではないかと少し身構えたが、ヒフミたちから少し離れたところで戦車は動きを止めた。
「ヒフミー！」

バンッ！　と戦車のハッチを勢いよく開けて現れたのはヒフミの予想通り、やはりアズサだった。
ヒフミにとって、それは戦車を見た瞬間からほぼ確信に近いレベルで予想できていたことだったが……できれば外れてほしい予想だった……。
ヒフミは本日三度目の目眩に悩まされて、フラフラと膝をつく。
「……そういえばアズサちゃん、言っていましたね。子猫を救出したら、戦車を奪うのもいいかもしれないと……」
いつも落ちついているハナコでも、さすがに本当にしでかすとは思っていなかったようで目を点にしている。
地面に膝と手をついたヒフミ、瞠目するハナコ、まるで状況についていけてないコハル。
三人の様子を素早く確認すると、アズサは大きく頷いた。
「ハナコがいて子猫がいないってことは、作戦は成功したんだね。コハルもいるし……これで戦力はじゅうぶん。これなら、正義実現委員会の連中とも十二分に戦える」
「た、戦っ……あ、あのっ、アズサちゃん！　ち、違うんです！　私たちは、アズサちゃんと正義実現委員会の戦いを止めるために――」
ドカアアアアンッ!!!
アズサに今からしようとしていることを伝えようとすると、またしても校舎の壁が爆発した。
さきほどはすぐ近くの壁が爆発したが、今度は少し遠方だ。爆発もさきほどよりは一回りも二周りも小さい。
だが壁を突き破って現れたものの正体は、ヒフミにとって戦車よりも衝撃的なものだった。
「あ、あれは……ッ、ツルギさんっ!?」
「ちっ。もう追いついてきたか」
正義実現委員会の委員長。トリニティの戦略兵器こと剣先ツルギ、その人。
彼女と戦った者は皆、潰れたトマトのような見るも無惨な姿に変わり、ただ戦いを見ていただけの者もＰＴＳＤに陥ってしまうという

……。
土埃が漂う中、その暴威の化身たる黒い影が揺らめき、血走った目がこちらを捉えた。
「くっ、くくくっ、くひっ……」
「ひっ……!?」
「敵ィ……敵イィ……！　敵イイイィィィッ！　きへあああぁぁあっ！　きえええええええええっっっ!!!」
「ひいいいいいいっ!?」
なんでこの人疾走する戦車を生身で追ってるの？　とか。どう見ても体当たりで壁壊してたけどその身体能力なに？　だとか。いろいろと言いたいことはあった。
だがそれ以上に、その異常な存在感と威圧感と圧迫感に当てられて、ヒフミは恥も外聞もなく悲鳴を上げた。
ツルギが足を踏み出し、こちらに駆け出してくる
尋常でない速度だった。それなりに遠くにいたはずなのに、見る見るうちに距離が縮まっていく。
「ヒフミ！　早く乗って！　私は応戦するから、ヒフミは運転を！」
手を伸ばしてくるアズサを見て、ヒフミは一瞬だけ逡巡したものの、すぐに意を決してその手を取った。
「わ、わかりましたっ！　こ、ここにいたのでは問答無用で処されてしまいます……！　そ、それだけは絶対にっ……！」
「ハナコとコハルも！」
「ふふふっ。まだまだ面白いことは続いてくれそうですね？　それじゃあ行きましょう、コハルちゃん」
「はぁっ？　ちょ、私は別にあんたたちとは関係な」
「敵ィ！　敵は四人、四人だァッ！　全員まとめて木っ端みじんだァァァ！」
「え、えええっ!?　わ、私も敵認定なのっ!?　えっ、いや、あのっ、ツ、ツルギ先輩っ！　わ、私は別にこの件とはなんの関係も――」
「きひ、きひひっ、きへあああああああああぁぁっ!!!」
「ひぃっ!?　ちょっ、お、お願いですから話を聞いてぇぇぇぇぇぇ!?」

……。

トリニティ総合学園の校庭を、問題児たちを積んだ戦車が爆走する。

その後ろには戦車と同じくらいの速度で疾駆する、二丁のショットガンを携えた生身の生徒がおり、戦車やその中にいる生徒と応戦していた。

校舎の屋上や校庭近くの木陰では、それぞれ自前のスナイパーライフルを構えた狙撃手たちが、狙撃の機を窺っている。

弾丸が飛び交い、爆発が木霊して、阿鼻叫喚な光景が広がる中、それでも和気あいあいと騒ぎ合う――。

それはキヴォトスでは日常とも呼べる、平和ないつもの光景であった。

なお、件の問題児四人衆は戦車の燃料が切れるまで暴れ続けて相当な被害を出した後、生身でも激しい抵抗（主に一人が凄まじく抵抗した）の末に正義実現委員の面々に拘束され、鎮圧。

事情聴取の後、猫を救出しようとしていたという善性からの行為であったことが一応は認められ……情状酌量の余地がかろうじて（本当にかろうじて）あったとして、一ヶ月間に渡る放課後での校舎のトイレ掃除という処罰で手を打たれたのだった。

ちなみに四人のうち一人は捕縛され連行される際や、処罰が下される際、「なんで私まで……」と死んだ目で虚空を見つめていたという……。

ヒフアズお泊り会（1／2）

「ふぁぁ……ぽかぽかですー……」

お風呂から上がったヒフミは、未だ残る心地良い温もりに幸せな声を上げながら脱衣所を出た。

自室に戻ってくると、少々だらしないことは自覚しつつ、その魅力に抗えずベッドに身を投げる。

ゴロンと寝転がって天井を見上げると、その気持ち良さから、はふぅ、と吐息を漏らす。

お風呂上がり特有の脱力感もあり、いつまでもこうしていたい衝動に駆られてしまう。

フカフカなお布団が眠気を誘い、徐々に瞼が下がってきてしまっていたが……途中でハッとして、ブンブン首を横に振って眠気を払った。

寝転がっているのは掛け布団の上だし、このまま寝てしまったら風邪を引いてしまう。電気だってつけっぱなしだ。

それに、まだ眠るには少し早い時間帯だった。

脱力感に身を任せゴロゴロしている時間は非常に心地良かったけれど、このまま横になっていたら気づかないうちに意識が飛んでしまいそうだ。

そう判断したヒフミは、少々後ろ髪を引かれる感覚を覚えながらも上半身を起こした。

けれどふかふかへの魅力はとても抗いたいもので……お布団の代わりとばかりに、ヒフミは枕の横に置いていたペロロのぬいぐるみを手に取った。

ギュッと両手で抱えると、中に詰まった綿がギュムッと柔らかな弾力で押し返してきて、ヒフミは締まらない笑みで何度もギュムギュムとぬいぐるみを抱きしめた。

「えへへ、ペロロ様～♪」

寝ないようにベッドから起き上がったはずなのに、ぬいぐるみの温もりで再び眠気に苛まれていると、ふと、枕の近くに置いていた端末

の通知ランプが点滅していることにヒフミは気がついた。
片手でぬいぐるみを抱えながら、ぐっと手を伸ばし、端末の画面を明かりをつける。
どうやらモモトークでアズサから連絡が来ていたようだ。
『ヒフミ。今、部屋にいる？』
最低限の文章で構成された簡素かつ簡潔なメッセージは、実にアズサらしい。
時間を見ると三〇分前と表示されていたので、ヒフミは急いで返事を打ち込んだ。
『ごめんなさい、返信ちょっと遅れちゃいました！　寮の自分の部屋にいますよ。ちょうどお風呂から上がったところです！』
既読はすぐについた。一拍置いて、返事も送られてくる。
『……その、ちょっとお願いしたいことがあって』
『お願いですか？』
どこか言いにくそうに口ごもるようなメッセージに、ヒフミは現実でもペロロのぬいぐるみを抱えながら首を傾げた。
『今日一日だけでいいから、ヒフミの部屋に泊めてほしいの』
今度は目をパチパチと瞬かせる。その後すぐに続けて『もちろん、無理にとは言わない』と遠慮気味に送られてきて、ヒフミはくすりと笑みをこぼした。
『もちろんいいですよ！　いつ頃こちらにつきそうですか？』
『……実は、もうヒフミの部屋の前にいる』
え。と思わず声を漏らしながら、ヒフミはぬいぐるみを置いて慌てて玄関に向かった。
覗き穴から外を覗くと確かに、見知った銀髪の少女が扉の向こうに立っている。
「あ、アズサちゃん？」
急いで解錠して扉を開くと、アズサは少し気まずそうにヒフミを見上げてくる。
その風貌は、なんというか迷子の子犬と重なるようで、くぅーん、という鳴き声がどこからともなく聞こえてきそうな光景だった。

「……こんばんは。ヒフミ」
「は、はい。こんばんは……えっと……アズサちゃん、いつからここに……？」
　アズサは正直に答えるべきかどうか迷うように逡巡した後、諦めたようにポツリと漏らす。
「十五分くらい前かな」
「そ、そんな前からですか？　来てたなら、チャイムを押してくれてもよかったんですよ……？　あ、お風呂に入っていたのですぐには出られなかったかもしれませんが……」
「モモトークならともかく、直接尋ねてまで泊まっていいか聞くのは、ダメだった時にヒフミが気にすると思って……」
「私のことを考えてくれたのは嬉しいですが、一番大事なのはアズサちゃん自身のことです！　……あ。ご、ごめんなさい、急に偉そうなことを言って……と、とりあえず、体が冷えちゃいますから中に入ってください」
「うん。ごめ……ううん。ありがとう、ヒフミ」
　普段よりちょっとだけしおらしい雰囲気のアズサを招き入れて、ヒフミは再び扉に鍵をかけた。
　アズサを自分の部屋に案内して、休むように言いつける。
「飲み物を淹れますが、紅茶とコーヒー、どちらが良いですか？」
「ん……砂糖はある？」
「ありますよ！　角砂糖がいっぱい！」
「じゃあコーヒーで。あと、角砂糖が二つくらい欲しいかな」
「わかりました！　ちょっと待っててくださいね」
　キッチンに移動すると、電気ケトルに水を入れて電源を入れる。
　その後はコップを二つ用意して、自分用には紅茶の、アズサ用にコーヒーの粉末を投入し、電気ケトルが音を鳴らしたら、沸いたお湯をそれぞれに注いだ。
　キヴォトスの生徒たちは皆、頑丈ではあるが、痛いものは痛いし熱いものは熱い。
　熱そうに湯気を出すコップをこぼしてしまったら大変なことに

なってしまうので、ヒフミは普段のおっちょこちょいを発動してしまわないよう、慎重に自分の部屋に運んだ。
「淹れてきましたよー」
少し前にヒフミが部屋を出ていく時、確かアズサはミニテーブルの前にちょこんと腰を下ろしていたはずだった。
けれど戻ってきた際に同じ場所にアズサの姿がなく、不思議に思ったヒフミは、何気なく部屋を見渡すように視線を動かしていく。
すると、ベッドの上に座ってギュ～～とペロロのぬいぐるみを抱きしめ、幸せそうに口元を緩めていたアズサと目が合って、二人の間に奇妙な静寂が流れた。
「……」
「……～～っ!?」
ヒフミより一瞬早くハッと正気を取り戻したアズサは、シュバババッ！　と目にも留まらぬ速度でペロロのぬいぐるみを横に置くと、何事もなかったかのように明後日の方向に視線をそらした。
しかしながらその頬と耳はタコもかくやというほど真っ赤に染まってしまっており、つい終瞬前の出来事をなかったことにするには、いささか証拠が残りすぎていた。
……残りすぎていたというか、ヒフミは現行犯を目撃してしまったのだけれど。
「そのペロロ様のぬいぐるみ、モフモフで気持ちいいですよね」
コップと角砂糖が乗ったトレイをミニテーブルに置きながらヒフミが言うと、アズサは答えづらそうに口を開いたり閉じたりした。
「……いや……その……」
「あ、特に羽根のところがすっごく気持ちいいんですよ！　とってもふかふかで……せっかくですし、アズサちゃんも触ってみてください！」
「えっ、あ、いや……わ、私は……」
ペロロのこととなると止まらないのがヒフミである。
なにせヒフミのペロロ好きは、ペロロのゲリラ公演に参加するために試験をサボタージュしてしまうほどなのだ。

いや、まあ、試験をすっぽかしてしまったのは覚えていた試験の日程が誤っていたからで、意図してサボったわけではないのだが……試験をサボタージュしたのは事実だし、覚えていた日程が合っていようと、試験日でなければ普通に授業をすっぽかしていただろうことも疑いようはない。

弁明の余地はなかった。

そんなヒフミはアズサの消極的な反応は意に介さず、ベッドに腰をかけているアズサの横に座ると早速とばかりにペロロのぬいぐるみを再び手渡して、羽根の部分を触ってみるように促した。

アズサは非常に戸惑っていたが、恐る恐ると言った具合にフニフニと羽根に触れる。

すると普段は少々冷たい印象を与えがちなその瞳が、感心と恍惚で揺れた。

「や、柔らかい……」

「そうでしょうっ？　抱き枕としても使えますし、私のお気に入りのペロロ様グッズの一つなんです！　あ、もちろんペロロ様のグッズはどれも全部大好きなんですけどね」

「……ふふ」

自慢気にぬいぐるみの良さを力説するヒフミを見ていると羞恥心も薄れてきたのか、アズサは再びペロロ様のぬいぐるみをモフモフとし始めた。

普段固めなアズサの表情が年相応に緩んでいる光景は少しばかり新鮮で、なんだかヒフミまで嬉しい気分になってくる。

ぬいぐるみを堪能するアズサを、ヒフミは横でしばらくニコニコと眺めていた。

「ありがとう、ヒフミ。うん、少し元気が出た」

「えへへ、力になれたのならよかったです！」

心なしか覇気がなかったアズサのことがちょっとだけ気にかかっていたが、彼女がそう言って気恥ずかしそうにしながらも微笑んでくれると、なんだかヒフミも救われるようだった。

せっかく淹れてきた飲み物が冷めるともったいないので、一旦ペロ

ロ様のぬいぐるみはベッドの脇に置いて、二人でミニテーブルの方に座り直す。
　角砂糖を入れ、フゥフゥと吐息で中身を冷ましながらコップを口につけるアズサに、ヒフミは少し申しわけなさそうに頬をかいた。
「インスタントでごめんなさい。お口に合いますか？」
「うん、平気。そういったこだわりはないし、ちゃんと美味しいよ。それに……このコップ、可愛いね」
「あ、わかりますかっ？　アズサちゃんに渡したコップにはモモフレンズのウェーブキャットさんの模様が入ってるんです！　そして、私のはペロロ様です！」
　ペロロやウェーブキャットは、同じモモフレンズというシリーズのキャラクターだ。
　そしてこの二人には唯一無二の親友だという設定がある。
　実は他にもモモフレンズシリーズのキャラクターが描かれたコップはあるのだが、アズサのそれにウェーブキャットをチョイスしたのはヒフミの無意識だった。
　自分が使うペロロ様のコップのすぐ近くにあったかもしれないし、もっと別の気持ちがあったのかもしれない。
「それで……アズサちゃん、急に泊まりたいという話でしたけど、なにかあったんですか？」
「……」
「あ、その……話したくないなら話さなくてもいいですから」
「ううん、大したことじゃないから大丈夫。ヒフミにはお世話になるんだし、ちゃんと話す」
　コップをミニテーブルの上に置いて、アズサが話をする態勢に入る。
　自然とヒフミも姿勢を正していた。
「……実は……」
「は、はい……実は……？」
「……部屋を、誤って爆発させてしまったんだ」
「……はい？」

「だ、だから……部屋を誤って爆発させてしまって……」
「……え……っと……ど、どうしてそんなことに……？」
アズサは初めこそヒフミの目を見ていたが、段々と視線を外し、再び頬を紅潮させていく。
なかったことにしたい過去を話すようなアズサの様子に、「き、聞いてもいいんでしょうか？」とちょっとだけ躊躇しつつも、聞かなければ始まらないので最終的には問いを投げる。
アズサは口をもごもごしながら事情を話してくれた。
「いつものように武装の点検をしていて……その中に手榴弾もあったの。それを誤って爆発させてしまって、他の爆発物も連鎖的に……」
「え!?　ア、アズサちゃんは大丈夫だったんですかっ!?　どこか怪我とかは……！」
「あ、私は大丈夫。爆発する寸前でギリギリ外に退避したから。でも部屋はベッドも含めて悲惨なことになってて……他の生徒たちも騒ぎを聞きつけて集まってきて、寮長にも怒られたし……」
「そ、そうでしたか。良かった、とは言えないかもしれませんが……アズサちゃんが無事なら、やっぱり良かったです。でも……手榴弾を誤って爆発させることなんてそうそうないと思うのですが、なにかあったんですか？　どこか不備とか……」
手榴弾は一般的にピンを抜いたらすぐに爆発するイメージがあるが、正確には少し違う。
安全ピンの他に安全レバーが存在し、ピンはその安全レバーを握っている状態でなければ抜けない構造になっている。そしてピンを抜いてしまった場合でも、レバーを握っている限りは爆発せず、抜いてしまったピンを戻しても問題なく機能するようになっているのだ。
レバーを握り込んだ状態でピンを外した後、レバーから手を離す。そうして初めて撃鉄が信管を叩き、手榴弾は爆発へのカウントダウンを始める。
つまるところ適切な管理さえしていれば、意図的に爆発させようとしない限り、暴発なんてことはそうそう起きないはずなのだ。
「……それは、その……」

アズサにはなにか暴発の心当たりがあるのか、ヒフミの純粋な疑問の視線を受けて、またなにか言いづらそうに口ごもっていた。
しかしいつまでも黙っていても埒が明かない判断したらしく、意を決した様子でアズサは顔を上げた。
「……点検の最中、窓の外で物音がしたんだ。それで驚いてしまって……普段なら銃を向けるんだけど、ちょうど持っていたのが手榴弾だったから、反射でピンを外してしまって……」
「えぇ……」
「すぐにしまったと思ったけど、その時にはもう投げる直前で、レバーから手を離すところまでいってしまってて……窓の外に誰かいるかもしれなかった以上、そのまま外に投げるわけにもいかなかったし……くっ。不覚だった……数々の訓練を積んできた私が、まさかあんな間抜けで初歩的なミスを犯すなんて……」
アズサは心底恥じるように唇を噛んでプルプルと震え、拳を握りしめている。
やけに落ち込んでいたのは、自分の部屋が爆発してしまったこともあるが、それを引き起こしてしまった自分の未熟を痛感していたからということもあったようだ。
ちなみに外から聞こえた物音の原因は、ちょうど部屋の外の手すりに鳥がとまっただけだったらしい。
アズサは突然の事態や驚愕に晒されると咄嗟に武器を向けてしまう癖があるので、今回はそれが悪い方向に作用してしまった形と言えるだろう。
警戒心が高いことは時にメリットにはなるが、高すぎるのも問題ということだ。
予想だにしなかった泊まりたい理由にヒフミは苦笑してしまいつつも、アズサを安心させるように少し大げさにコクリと頷いてみせた。
「あはは……わかりました。そういうことなら、是非自分の家みたいにくつろいでくれていいですからね」
「……ありがとう。この恩はいつか必ず返す」

「えへへ。恩だなんて、そんなの気にしなくたっていいんですよ。私とアズサちゃんは友達ですし、お泊り会なんて合宿以来ですしっ。部屋が爆発しちゃったアズサちゃんにはちょっと悪いですけど、実はちょっと楽しくなってきちゃってるんです……！」
「……ふふ。うん、そう言ってもらえると嬉しい。やっぱり、ヒフミにお願いしてよかった。ヒフミといると、不思議と元気が出る」
アズサが頼る候補には他に、ハナコやコハルと言った面々がいたはずだ。
それでもその中から真っ先にヒフミを選んだのは、少なからずアズサがヒフミに懐いている証左でもあった。
ヒフミもそれを感じて、照れくさそうに頬をかいて微笑む。
そんなこんなで、急遽二人きりのお泊り会が開催される運びとなったのだった。

ヒフアズお泊り会（２／２）

ふとヒフミがアズサに聞いたところ、どうやら彼女はまだ入浴を済ませていなかったらしい。
アズサの部屋が爆発した原因は手榴弾の誤爆からの連鎖爆発だが、元はと言えばアズサは武装の点検をしていた。
そういった作業は得てして汚れやすいため、二度手間にならないように、入浴は点検が終わった後にしようと考えていたようだ。
しかし結局はその点検の最中に部屋がめちゃくちゃになってしまったことで、彼女は今に至るまで風呂に入り損ねてしまっていた。
そういうわけで、よく嗅いでみると若干鉄と油臭かったアズサを、ヒフミは風呂場に案内する。
服などが入っているタンスは別の部屋にあったおかげで、爆発には巻き込まれず無事だったらしい。そこから着替えはきちんと持ってきているようだったので、ヒフミのものを貸し出す必要はなさそうだ。
脱衣所で制服を脱ぎ始めたアズサに背を向けると、ヒフミは今度はキッチンに足を運ぶ。
冷蔵庫の中身を確認し、しばらく考えた後に「よし！」と一人頷く。
そして、手早く二人分の軽い夜食の準備をし始めた。
夕食については、実のところヒフミもアズサも寮の食堂ですでに済ませている。
けれど、大変な目に合ってアズサも疲れているはずだ。
少し落ち込んでもいたようだし、そういう時はきっと美味しいものを食べるのが一番だ。
そうして料理がちょうど出来上がったタイミングで、アズサが暖簾をかき分けてキッチンに入ってきた。
「上がったよ、ヒフミ……ん？　この匂いは……」
風呂から出たことで制服からパジャマに着替えていたアズサは、漂ってきた匂いにスンスンと鼻を鳴らす。
「あ、おかえりなさいアズサちゃん。ちょうど出来たところで……っ

て、まだ髪がちょっと湿ってませんか……？」
「ああ、これくらいなら別に平気」
　自分の髪を軽くかき分けて状態を確かめたアズサはそう言ったが、なんだか疑わしく感じたヒフミはアズサに近づいた。
　アズサの髪を近くで直接観察し、想像以上に割と濡れていたことが判明すると表情を険しくする。
「……アズサちゃん、お風呂上がりのケアってかなり大事なんですよ？　アズサちゃんはせっかく長くて綺麗な髪をしてるんですから、もっと大切にした方がいいと思います」
「でもこれくらいなら私はいつも」
「いつも⁉　いつもこれくらいで放置してるんですかっ⁉」
「えっ。う、うん……」
　アズサはやぶ蛇をつついたような気分になる。
「アズサちゃん……私が髪を乾かしますから、ちょっとこっちに来てもらってもいいですか？」
「いや、私は……わ、わかった。ヒフミに任せる」
　鬼気迫る様相のヒフミに気圧されて、アズサは気がついたら頷いてしまっていた。
　その後すぐに半ば強引にヒフミに洗面所まで連れていかれて、鏡に正面を向けるようにして立たせられる。
「では、触りますね」
「ん……」
　戸惑うアズサの背後から、ヒフミはアズサの髪を傷つけないよう丁寧にブラシで梳かしていった。
　これまで他人に髪を触られる経験がほとんどなかったアズサは、ヒフミの手とブラシの感触に、たまにくすぐったそうに身動ぎをする。
「……ヒフミ、いつもこんなことやってるの？　あ、誰かにって意味じゃなくて、自分の髪」
「もちろん毎日やってますよ。髪は油断するとすぐ傷んじゃいますし。私だけじゃなくて、このくらいはおしゃれに興味がある子なら皆欠かさずやってるはずです」

「へえ、そうなんだ」
「アズサちゃんは、あんまりしてこなかったんですか？」
「私は……まあ、そうだね。トリニティに来る以前は、任務や目標についてしか考えたことはなかったし……その達成には、おしゃれなんて不必要なものだったから」
「任務と目標だけ……アズサちゃん、私は」
「大丈夫。ヒフミが気にすることじゃない。それに今は……うん。今は、こういう非効率で何気ない時間も、悪くないって思ってる。この気持ちは嘘じゃない」
　自分の感情を確かめるように胸に手を当てて、目を閉じながら。
　最初こそアズサを心配してしまっていたヒフミも、そんなアズサの様子を鏡越しに認めると、自然と破顔してしまっていた。
「えへへ、それならよかったです。これからいっぱい覚えればいい話ですもんね。アズサちゃんは元々が可愛いですし、どんなおしゃれだって似合うと思うんです！　普段つけてる花の髪飾りだって凛々しい感じで素敵ですし……さらに一工夫すれば、きっと皆の視線を釘付けにできるに違いありません！」
　実際、アズサは相当可愛い。ただ普通に街を歩くだけでも他のトリニティの生徒から注目されるくらいには。
　珍しいトリニティへの転校生という肩書きが付随しているゆえという部分もあるが、それを差し引いてもアズサは普通以上に可憐で美麗だ。
　その容姿端麗さと常に冷静沈着な様子から、なんでも一部では『氷の魔女』なんて呼ばれてるとかいう話をヒフミは聞いたことがあった。
　そんなアズサが本格的におしゃれを覚えれば、間違いなく皆の視線を釘付けにできる。ヒフミにはそんな確信があった。
　しかしそんな高評価を受けた当の本人と言えば、気が進まなさそうに眉をしかめていた。
「いや、釘付けは困るかな。目立ちすぎると人混みに溶け込むのに支障が出る。潜入や尾行の際にも、そういった視線は邪魔になるだろう

し」
「あ、はい……あ、あはは……」
バッサリと切り捨てられてしまって、ヒフミは少し苦笑いをする。
トリニティに来てからの経験で変わってきているとは言え、任務や目標を第一に考えるアズサの根底に根づいた常識は根強いものだ。
「……でも」
呟くように続いたその言葉に、ヒフミはなんとはなしに耳を傾ける。
「可愛い格好には……その、少し興味がある……かも」
「……！　……えへへ」
ボソリと小声で付け足された、その普通の女の子らしい一言は、決して悪いものではなかった。
その後は特にこれと言ったやり取りはなく、ヒフミがアズサの髪を手入れする時間が続いた。
この頃になると髪を触られる感触にも慣れてきたのか、アズサはたまに気持ちよさそうに目を細める。
そんな時間は、アズサの髪がドライヤーで髪が乾かされるまで続き……その間ずっと、彼女は無言でその感触に浸っていた。
「はい、終わりましたよ」
「え、もう終わ……あ、いや！」
「……？　どうかしましたか？　まだどこか乾いてないところとか」
「な、なんでもないっ。平気、もう大丈夫……その、私はこういうのまだあんまり慣れてなかったから、助かった」
「どういたしまして、です」
途中からアズサの髪を大事に扱うことに注力していたヒフミは、その間、鏡に映ったアズサがどんな表情をしていたかまでは見えていなかった。
必死に取り繕おうとするかのようなアズサの反応をヒフミはちょっとだけ不思議に思いつつも、髪を触られたのが嫌だったという風ではなさそうだったので、それならいいかと気にしないことにした。

「さあ、髪も乾いたことですし、一緒にご飯を食べましょうか」
　またキッチンに戻ってくると、すでに出来上がっていたものを二人分の皿に移して、部屋に運ぶ。
「その、実は部屋にはあんまり食材とか置いてなくて……ありあわせのもので作った簡単なものなんですけど……」
「ううん、気にしないで。とてもおいしいから。ヒフミの優しさが伝わってくるみたい」
「え、えへへ。なんだかちょっと恥ずかしいですね……」
　フレンチトーストについて話すアズサの声は、ほんのわずかだけれど上ずっていた。
　こういった夜食を作るのは、もしかしたら余計なお世話かもしれないと思っていたけれど……どうやら喜んでもらえたみたいだ。
　フォークを手にフレンチトーストを口に運ぶアズサをチラリと覗きながら、ヒフミは密かにほっと胸を撫で下ろした。
　フレンチトーストを食べ終えた後は、まだ床につくには少し早い時間だったこともあり、せっかくなので二人で少しだけ勉学に励むことにした。
　アズサはヒフミと同じ二年生ではあるが、転校前の学校との学習進度の違いで、同時進行で一年生用の内容も勉強している。
　いつかは二年生の内容に完全に追いつく必要がある以上、アズサには学ばなければいけないことが人一倍あった。
　それを加味すれば、こういった空き時間での勉強や、補習授業部の活動で行う補習や自習は、アズサにとっては他の三人の部員たちよりも重要な意味を持っていると言える。
「――ふぁぁ……終わりましたー……」
　ヒフミが自分の課題を進める傍ら、問題集を進めるアズサがわからなかった部分について偶にヒフミに質問する。
　そんな時間がしばらく続いた後、ようやく課題が一段落したヒフミは、小さくあくびをしながら時計を見た。
「んー……もう結構な時間ですね……そういえば明日は自由登校日ですけど、アズサちゃんは学校に行くんですか？」

「ああ、私は行く予定。そういう時間で地道に訓練を積み重ねていかないと、いつまでも一年生ぶんの学習が終わらないから。ヒフミは？」
「実は私も、この前ペロロ様グッズを買いに行くために授業をこっそり抜け出してしまったので、その埋め合わせの勉強をしようと思っていて……せっかくですしアズサちゃん、一緒に登校しませんか？」
「わかった。ヒフミがそれでいいなら」
「じゃあ決まりです！」
友達と一緒に登校する。
言葉にしてみればなんてことのないことだけれど、なんだか無性に楽しくなってくる。
それはさながら、遠足を次の日に控えた子どものような気分だ。
一方アズサは、なぜ一緒に学校に行くというだけで、ヒフミがこんなに楽しそうにしているのかよくわからなかったが……まあヒフミが嬉しそうなら別によしということで、喜ぶヒフミをなにを言うでもなく見守っていた。
ヒフミを何気なく眺める自分の顔がほんのわずかに緩んでいたことには、アズサ本人も気づいていないようだったけれど。
「えへへへ、そうと決まったら明日に備えて今日はもう寝ないとですね！　このまま勉強していたら寝落ちしてしまいそうですし、この辺りで切り上げて、ぐっすり眠れるようきちんとベッドで……あ……」
「……？　どうかした？」
「……べ、ベッド……そういえば一つしかありません……」
一人で暮らしている空間なので寝具も一つしかない。
至極当たり前のことだったが、ヒフミは今になってようやくその当たり前に気がついた。
「ああ、そんなことか。それなら平気。心配はいらない」
「えっ？」
重大な事実に気がついてしまったというようなヒフミに反し、アズサは至って冷静だ。
どうやらアズサはヒフミとは違い、初めからこの展開を予測し、想

定していたみたいである。
ヒフミは思わず、期待を込めた目線をアズサに向けた。
「あ、もしかしてアズサちゃん、寝袋とか持ってきて――」
「硬い地面で寝るのは慣れてる。私は床で寝るから、ヒフミは普段通り自分のベッドで寝て」
「――ないですね?!」
想定していたのに、なんの備えもしていなかったらしい。
むしろ想定したからこそだろうか。
別に床でも寝られるから、特になにも手を打つ必要はないと判断したのであろう。
つまるところ最初にヒフミの部屋を訪れた時から、アズサは床で寝る気満々だったのだ。
「ダ、ダメですよアズサちゃん！　寝心地も悪いですし……！　起きた時に体が痛くなっちゃいます！」
ヒフミが反対してくるのは想定内だったのか、アズサは常と変わらぬ冷静な態度を崩さない。
「安心して。どんな場所や体勢でも効果的に睡眠を取れる訓練は積んでるから。睡眠時間が不十分だと得てして判断が鈍りやすい。力を発揮すべき時に発揮できるよう、そういう訓練も積んであるの」
「く、訓練とかそういう問題じゃなくてですね……！　余ってる毛布とかもありませんし、風邪でも引いちゃったら大変です！」
「座りながら寝れば寒さも多少は軽減できるし、一日くらいなら平気だよ」
「で、でも……」
「第一、ないものはないんだからどうにもできない。ベッドは一つで、どっちかが床で寝るしかない以上、それが泊まらせてもらってる身である私になるのは自然な流れ……でしょ？　これ以上ヒフミの手を煩わせるのは私としても不本意だし、私は本当に大丈夫だから、ヒフミはなにも気にしないで」
「う、うううぅ……」
アズサが言っていることは、正論だ。

ないものはない。なければないなりに対応するしかない。
ないものねだりをいくらしたところで、今から布団を二人分用意することなどできないのだ。
だけどヒフミは、友達が硬い床で寝ている横で自分だけ平気で柔らかいベッドで寝るなんて行為は、どうしても許容できそうになかった。
もしもそんなことになってしまったら、きっとベッドに入っている間はずっと罪悪感と自己嫌悪に苛まれる。
そんな状態で気持ちよく眠るなんてできるはずもないし、なんなら近くで寝ているアズサのことが気になりすぎて一睡もできないかもしれない。
そんなことになるくらいなら、アズサと一緒に床で寝た方がまだマシだと思えた。
だけどヒフミが自分も床で寝ると言い出してしまったら、アズサは全部自分のせいだと気にしてしまうに違いない。
それはヒフミがベッドに入ることで味わうだろう罪悪感などの感情を、すべてアズサに押しつけることと同義だ。
それでは意味がない。
ヒフミはただ、まだ心のどこかで落ち込んでいるだろう彼女に、なにも気に病むことなく温かいベッドで休んでほしいだけなのだ。
そしてそれをどうしても叶えたいのなら……ここで取れる手は、おそらく一つしかない。
「……しょ、に……」
「……？　ごめんヒフミ。よく聞こえなかった。もう一回言ってもらえる？」
「っ、いっ、一緒に寝ましょうアズサちゃんっ！　同じベッドで……！」
「……」
ヒフミの反対を予見していたアズサでも、この提案ばかりは完全に予想外だったらしく、落ち着き払っていた表情を崩してポカンとしていた。

「……本当に良いの？」
ヒフミは先にベッドに入ると、端に寄ってアズサが入れる隙間を作る。
しかしながらアズサはベッドの前で難しい表情で佇むばかりで、その中に入ることに気が進まない様子だった。
ヒフミが同じベッドで寝ようと提案した時からこんな感じで、アズサはしきりにそれで良いのかと確認していた。
「だ、大丈夫です……！　それとも、その……アズサちゃんは、私と一緒というのは嫌ですか……？」
「いや、私は別にいいけど……ヒフミの方こそ良いの？」
「は、はい。もちろんその、こんな歳にもなって誰かと一緒に寝るなんて恥ずかしいという気持ちはありますが……それ以上に、やっぱりアズサちゃんだけを床で寝させるわけにはいきません……！」
きっとヒフミが少しでも難色を示せば、アズサはやっぱり自分は床で寝ると言い出していただろう。
けれどアズサを温かい布団で寝かせたいというヒフミの意思は固く、アズサが何度確認しても自分の意見を曲げようとはしなかった。
そう……こうして実際にベッドに入る直前まで、何度も何度も聞き直したことだ。
アズサはヒフミの返答に、ようやく諦めたように嘆息すると、おずおずとヒフミと同じ布団の中に潜り込んだ。
「あ、アズサちゃん。そんなに端だと落ちちゃいますから、もうちょっとこっちに……」
ヒフミが一人で暮らしている部屋なので、当然シングルベッドだ。二人で寝るには普通に狭い。
アズサとしては、せめて端っこで縮こまることでヒフミが寝るスペースを広く残しておく算段だったが、ヒフミは案外目ざとく、そんな細かな遠慮も見逃してはくれなかった。
「私は別にここでも……いや、うん。わかった」

アズサは最初こそ自分の意思を主張しようとしたものの、早々に意見を翻す。
さきほど何度も確認し合ったこともあり、下手に抗議したところで無駄だと判断したのだった。
実際、ヒフミはアズサに気兼ねなくしっかり休んでもらうためにもあの手この手で説得しただろうから、アズサの判断は正しかったと言える。
アズサがきちんと布団の中に収まったことを確認すると、ヒフミはリモコンで部屋のライトを消した。
部屋の中が暗闇に包まれて、窓を覆うカーテンの隙間からわずかに差し込む月明かりだけが光源になる。
ほんの一寸先も見えない程度の明かりしかなかったが、密着と言っていいくらい距離が近い関係で、ヒフミとアズサはお互いの顔くらいなら見ることができた。
「……え、えへへ……やっぱりその、ちょっとこそばゆいですね……普段何気なく喋っている友達と、一緒のお布団で寝るというのは……」
「なら、私はやっぱり床で」
「それはダメです！　そもそも、別に嫌という意味で言ったわけではなくて……ふふっ」
「……？　どうかした？」
「いえ、どうというほど大したことではないんですけど……なんというか、こうして同じお布団の中にいると、なんだかアズサちゃんと家族になったみたいで、不思議な気分だな、と」
「……家族か……」
アズサは少し考えるように数秒ほど目を閉じた後、くすりと穏やかに微笑んだ。
「なら、私は妹かな。ヒフミより小柄だし。そうなるとヒフミは姉になるから……ヒフミお姉ちゃん？」
「お、お姉ちゃん……！　新鮮な響きです！」
「まあ私たちは同い年で同級生だから、どっちが姉でどっちが妹かは諸説あるかもしれないね」

「なるほど……それもそうですね。つまり、アズサちゃんがお姉さんという線もあるかもしれないということですか……」
「……自分で言ってみてなんだけど、私が姉というのは合わないな……」
「そうですか？　アズサお姉ちゃん！　……良い響きだと思いますが」
「……や、やめて。なんだかよくわからないけど、体がムズムズする……」
「ご、ごめんなさい……？」
アズサの頬には少しばかり朱が差していて、ヒフミと視線を合わせづらそうにそらしていた。
……たぶん気恥ずかしいんだろう。
それからお互いに瞼を閉ざしたまま、しばらく沈黙が続く。
アズサが一緒だからだろうか。ヒフミはいつもと比べるとなかなか寝つけなかった。
だけどアズサはどんな状況下に置かれても、いつだって落ちついている。
こんな場面でも特に緊張を覚えることもなく、もしかしたらもうすでに寝てしまっているかもしれない。
どうしても眠気がやってこなくて、そんなことをつらつらとヒフミが考え始めた頃、不意にポツリと声が聞こえてきた。
「……今日、ヒフミに最初のメッセージを送った時」
「……？　はい」
ヒフミは薄く瞼を開けるが、アズサは目を開いておらず、その唇だけが動いていた。
小さく、囁くような声量だったけれど、暗闇と静寂で包まれた空間にはよく響く、透き通るような声だった。
「ヒフミから返事はなかったけど……ヒフミなら良いって言ってくれると思ったから、その、返事が来る前から向かっちゃってた」
「……私が返事をした時にすでに玄関の前にいましたからね。あの時はちょっと驚いちゃいました」

「迷惑だった？」
「ふふっ、そんなことあるわけないじゃないですか。こうしている今の時間も、私は楽しいですよ」
「うん……私もきっと、同じ気持ち。だから、もしかしたら私は……その、私自身が思っている以上に……ヒフミのこと、頼りにしてるのかもしれない」
「アズサちゃん……」
「……そ、それだけ。別に深い意味があるわけじゃない……そ、そろそろ本当に寝よう。これ以上起きてると、明日の体調にも影響が出る」
「……えへへ、そうですね」
ありがとう、と。きっとアズサは、そう言いたいんだろう。
不器用だけど正直で、正直だけど少し回りくどくて。アズサにしては珍しく、距離を縮めるような言葉。
いつもフワフワしてて悩みがなさそうに見えるせいか、ヒフミはよく他人から相談を持ちかけられることがある。
そういう時は大抵、ヒフミは相槌を打つだけで、実際に力になれることはほとんどない。
だけど今、ヒフミはきちんと力になれているのだと、他でもないアズサ自身が教えてくれた。
それがどうしようもなく嬉しくて、ヒフミは今日一番の笑みを浮かべていた。
「アズサちゃん」
名前を呼んでも、アズサはあいかわらず瞼を開けない。
まだ起きているのか、もう寝てしまったのか。
どちらかはわからなかったけれど、それでもヒフミは続きを言った。
「今日一日だけという話でしたが、部屋が元に戻るまで、いつまででもいてくれていいですからね」
「……」
アズサから返事はなかったが、コクンとかすかに頷くようなその仕草を、ヒフミは見逃したりしなかった。

アズサの言う通り、これ以上起きていたら明日に支障が出る。
ヒフミも再び視界を闇で閉ざして、眠ろうと試みた。
シングルベッドに二人で寝ている関係で、当然狭いし、少し熱い。
ただ、それでも寝心地が悪いなんてことはまったくなくて、次第に心地の良い眠気がやってくる。
その眠気に意識を預けると、ヒフミは深い眠りに落ちていった。

――そんなこんなで、ヒフミとアズサが同じ部屋で寝泊まりした翌々日のさらに翌日。要は三日後。
キヴォトスでは構造物の倒壊なんて日常茶飯事なので改装も手早く済んで、その頃にはアズサの部屋もすっかり元通りだった。
まあ壁や床などが元に戻っただけなので、家具は買い直さなければいけないが……その点は、ヒフミもアズサにしっかり付き合う所存だ。
さて。その日は自由登校日でもない、普通の登校日だった。
放課後には補習授業部の活動こと自習勉強に励もうかと、ヒフミとアズサはいつも通り教室に足を踏み入れる。
しかしどうにも、教室にはなにやら奇妙な空気感が漂っていた。
その空気を醸し出していたのは教室にやってきたハナコとコハルだったようで、二人は教室の後ろの方で固まってなにかをヒソヒソと話していた。
教室に入ってきた二人に対し、ハナコは面白そうにニコニコと笑顔を向け、コハルは瞬時に頬を赤らめて視線をサッとすぐにそらす。
ハナコはまあ、いつも通りなので良いとして……コハルの反応に少々首を傾げつつ、ヒフミはアズサを連れて二人に近づいた。
「こんにちは、ハナコちゃん。コハルちゃん。なにかお話されていたようですが、なんの話をしてたんです？　コハルちゃんの様子がちょっとおかしいですけど……」
「こんにちは、ヒフミちゃんにアズサちゃん。ふふっ……いえ、大したことじゃありませんよ。つい最近小耳に挟んだ、風の噂について話し

ていたんです」
「風の噂、ですか？」
　ヒフミがオウム返しで聞き返すと、ハナコはさらに笑みを深めて――唐突に爆弾を投下した。
「はい。なんでもここ数日の間、ヒフミちゃんとアズサちゃんは同じベッドで熱い夜を過ごしていたとか……そういう噂です♡」
「……はい？」
「ここ数日の間、ヒフミちゃんとアズサちゃんは」
「い、いえ、聞こえなかったわけではなくて……え。えっ……えっ？
な、なん……え、なん、なんで知……え……？」
「落ちついてくださいヒフミちゃん。壊れたレコードみたいになってしまってますよ」
　あまりの混乱で思考が麻痺してしまっていたが、どうどう、とハナコに宥められて、ほんの少しだけ冷静さを取り戻してくる。
　そうすると当然ながら羞恥心が一気に湧き上がってきて、一気に全身の体温が高まることをヒフミは感じた。
「な、なんで……ど、どうやってそんなこと知ったんですか⁉」
「どうやってと言われましても……二人が早朝に同じ部屋から仲睦まじく出てくる様子が見られたと、そこそこ噂になっていましたよ？」
「う、噂……？　え……？　そ、そんな噂、私は欠片も……」
「まあ、ここはトリニティですからね。公共の場で本人に直接聞いてしまうほど、デリカシーのない生徒はあまりいないでしょう。ヒフミちゃんが知らなくても無理はないかと」
「……」
「アズサちゃんは……知ってたみたいですね？」
「えっ……そ、そうなんですか？」
　ヒフミが思わずアズサの方を振り返ると、確かにアズサは今の話を聞いても平然としているように見えた。
　アズサは普段通り憮然とした態度で答える。
「うん、知ってた。身近に迫る危険を少しでも察知するためには、こまめな情報収集は基本。今ハナコが言った情報も今朝仕入れた」

「し、仕入れたって……ア、アズサちゃん、どうしてそんな平然としてるんですか……!?　こ、これ、ものすごい誤解を招く噂ですよっ!?」
「誤解？　別になにも間違ってはいないと思うけど？　広まってたことは確かに結構恥ずかしかったけど……ここ数日、私とヒフミが同じベッドで寝てたのは事実だし」
　純情なアズサは事の大きさにまったく気がついていないらしく、コテンと無邪気に小首を傾げている。
　そしてそんなアズサの発言に、二人から気まずそうに視線をそらしていたコハルがキッと二人を睨んだ。
「や、やっぱりあんたたち……！　ふ、不純異性交遊は重罪よ!?　校則違反よ!?」
「ふふっ、コハルちゃんも落ちついてください。ヒフミちゃんとアズサちゃんは同性なので不純異性交遊には当てはまりませんよ。あと、そういったお付き合い自体は別に校則違反でもなんでもありません。まあ……情事に関しては別なのですが」
「情事!?　そ、それって……そ、そういうことよね？　同じベッドで寝たってことは、やっぱり二人で、あんなことやこんなことを……!?　じゃ、じゃあやっぱり校則違反じゃないの！」
「ご、誤解ですよ!?　コハルちゃんがなにを想像したのかはわかりませんが、私とアズサちゃんはそういう関係じゃありません！　た、確かにアズサちゃんとは一緒に寝ましたが……それはただ言葉通り本当に同じベッドで寝たというだけで、それ以上のことはなにも……！」
「なるほど、同じベッドで寝たのは真実と。年頃の女の子が密室で二人……それも、同じベッドで。ふふっ……そんな状況でなにも起きないはずがありませんよね？　校則違反だから隠しているだけで、きっといろいろなことがあったに違いありません」
「あ、あうぅ……だ、だから違くて……」
　場をかき乱すのが大好きなハナコと、想像力豊かなコハル。この二人が合わさってしまうと、こういった誤解は手に負えないレベルでひどくなっていく。

そのことはヒフミは身をもって知っていた。
ヒフミ一人ではどうにもできない。
思わず助けを求めるようにアズサを見ると、それに気づいた彼女は……なぜか若干照れくさそうに視線をそらした。
え。えっ。どうしてそんな反応なんですか？
ヒフミはマジでアズサにはなにもしてないしなにもされてない。
なのになんでこんな反応されたのかと困惑していると、アズサがボソリと呟くように言った。
「……あの時は自分の失態に参ってたから……確かに、少し変なこと言い過ぎたかも。ヒフミのこと、お姉ちゃんなんて……今思い返すと、だいぶ恥ずかしい……」
「まあ、姉妹プレイですか？　ずいぶんとマニアックですね……」
「アズサちゃんんんっ!?　い、今はそういうこと言っちゃダメです！　も、もっと誤解がひどく……！」
「し、姉妹プレイ!?　そ、そんなの本でもほとんど見たことないのに……う、うぁぁ！　へ、変態コンビ！」
「コハルちゃん……どうしてコハルちゃんは、いつもハナコちゃんの言うことを真に受けちゃうんですか……？」
やはり収拾がつかない。
こうなることは半ば予想できていたが、できることなら回避したい未来であった。
本当はヒフミとアズサが普通に寝ただけなことに気づいてるだろうハナコが、意図的に爆弾を投下し続けて。
コハルがそれに過剰に反応し、妄想力を爆発させる。
純情なアズサは二人が話していることの本質には気づかず、ハナコとは逆に意図せず火薬を二人に提供し続けて……。
そしてヒフミは、そんな破茶滅茶な三人に翻弄され振り回される。
ヒフミは補習授業部の皆が好きではあるのだが……気苦労が絶えない毎日に今日もまた一人、天井を仰ぐのだった。